氷結鏡界のエデン　目指すはハッピーエンド

咲亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
氷結鏡界のエデン　目指すはハッピーエンド

【Ｎコード】
Ｎ７２７３Ｙ

【作者名】
咲亜

【あらすじ】
これは主人公がパートナーのユリ＝ミストルティンと氷結鏡界のエデンの世界に転生し、イレギュラーを倒すために原作介入する話です。
主人公とパートナー最強系でいくのでそれが苦手な方はご遠慮下さい
文才皆無で読みにくかったり、性格や喋り方がかわってるかもなのでそれが嫌な方もご遠慮下さい。
なるべく原作をしらなくてもわかるようにしようと思っているので気軽に読んでくれると嬉しいです。

主人公最強系ですが、イレギュラーもチート級にしようかなとか思ってます。

1話　プロローグ（前書き）

はじめまして咲亜です。
最近氷結鏡界のエデンを友達に借りて読んでたらはまってしまい、
その日に全巻買いに行きました。
読み終わるとなぜか咲亜の妄想が止まらなくなり、その妄想が
この物語です。

1話　プロローグ

目が覚めると俺は全てが真っ白なところにいた。

「気がついたかの。」

後ろから老人の声が聞こえてきた。俺は後ろに振り返ってみるとやはり老人が立っていた。
なんで俺はこんなところにいるのだろう。俺は確か・・・・「そうじゃ、お主は死んだ。」
そう、俺は事故に遭って死んだはず・・・えっ？今俺の心読まれた？！

「わしは神だからの、それくらい簡単じゃ。それよりもお主は転生してもらう。それと転生する時にお主の願いを7つ叶えてやるぞ。」

えっ？神？？転生？？　なにそれ？？

「まずわしはさっき言ったとおり神じゃ、名前はジテン。そして転生というのは、お主がいた世界とは別の世界に記憶を持ったまま生まれ変わる事のことじゃ。別の世界とは例えば、お主が女として生きている世界や、アニメなどの世界などがあるのじゃ。」

ふむふむ、すこしわかったぞ。それで俺はなんで転生するんだ？

「お主にはその世界に行ってイレギュラーを倒して欲しいのじゃ。わし等神は世界に直接介入することができないからの、だからお主を呼んだというわけじゃ。ちなみにお主に行って欲しい世界は氷結鏡界のエデンという世界じゃ。」

イレギュラー??　えっ?氷結鏡界のエデンって俺の好きな小説じゃん。

「イレギュラーというのは、本来ならばその世界に居ない者や起こらないはずの事をそう呼ぶのじゃ。そのイレギュラーを放っておくと世界は消滅する。今回お主に行ってもらう世界のイレギュラーは世界を破滅させようとしている人のことじゃ。」

なるほど、だから俺は転生してそのイレギュラーを倒さなければいけない。
そういうことか
あと、イレギュラー倒したら俺は役目がなくなってその世界から消えたりする??

「お主は氷結鏡界のエデンの世界で普通に第二の人生を送れる。そのついでイレギュラーを倒してくれたらいいのじゃ。それに今から行く世界はお主の世界、別に原作通りにしなくてもいいのじゃぞ?その世界はお主が知ってる世界とはとても似ているが違う世界だからの。」

第二の人生か・・氷結鏡界のエデンの世界に行くんだからやっぱり力はいるよなぁ・・・
力ないとイレギュラーも倒せないしね。
まずはパートナーが欲しいかな。だってもしあの世界に行って一人だったら寂しいしね。

「どんなパートナーがいいのじゃ?アニメのキャラとかでも可能じゃぞ。もちろんお主がいた世界の住民も相手がＯＫすれば可能じゃ。」

なら、ユリ＝ミストルティンをパートナーにお願い
～「ユリ＝ミストルティンは主人公の世界にあるアニメのキャラです。」～
あれ、今なにかきこえたような・・・

「わかった。願いはあと６つ叶えれるぞ。」

２つ目はシェルティスより強い魔笛と世界で１番強い沁力を持ってる人の１００倍の沁力が欲しい。
３つ目は魔笛と沁力を制御し、術式を作ったり自由に使える力
４つ目は身体能力ＭＡＸ
５つ目は戦いの才能
６つ目は技術の才能
７つ目はパートナーのユリにも能力を与えること

「ふむ、これは面白そうじゃな。しかし、４つ目の身体能力ＭＡＸというのは無理じゃ。
なぜならデフォルトで元からＭＡＸになっとるからの。あとユリに能力を与えると言ってもお主ほどは無理じゃぞ。それでもいいかの？」

７つ目はそれでいいよ
４つ目の分は必要になったときに決める。じゃだめかな？

「大丈夫じゃ。よしではさっそく行ってもらうぞ。」

ジテンがそう言うと足元に黒い穴が出来た

「えっ？ええええええええええええええええ――――。」
俺は足元に出来た黒い穴に落ちた。

1話　プロローグ（後書き）

2話　いろんな出会い（前書き）

2話目できました。

2話　いろんな出会い

気が付くと目の前は綺麗な青色だった。周りを見渡してみると隣に3才位の女の子がいた。
パートナーのユリだと思う。一応確認のために聞いてみた

「ユリ??」

「はい、あなたの知ってるユリです。」

やっぱりユリだった。しかしユリが3才位になってるということは・・・俺も・・・
と思い自分の体を見てみる。やはり俺も3才くらいになっていた。
あっそういえば名前変えないとなぁ・・・どんなのがいいかな・・・
・よしっこれにしよう

「ユリ、俺の名前は今からアリアだ。これからよろしく。」

「こちらこそよろしくお願いします。それと言葉遣い変えたほうがいいですよ?」

確かに3才くらいで、〜だ　とかはおかしいよね

「うん、わかったよ。これから気をつけるね。」

不意に
ぐぅ――――――
とお腹が鳴ってしまった

「俺達さ、親居ないし、家もお金もないんだけどどうしよう・・・」

「うーん。そうですね…」

俺とユリはしばらく考え込んでいた

どのくらい経っただろうか

後ろの方から声が聞こえた。

「そこの二人、もうこんな時間よ、早くお家に帰りなさい。」

振り返ると金色の長髪を頭の高い位置でまとめた女性がいた。

早くおうちに帰りなさいって言われても帰る家ないんだよね・・・

「あれ、もしかして自分のお家の場所わからないのかな?」

「いえ・・・そうじゃないんですけど・・・ね、アリア?」

「う、うん。」

「どうしたの?よければ話してくれないかな??」

『ユリ、どうしよう?』

俺は念話を使ってユリに聞いてみた

『ここは正直に言ったほうがいいと思うよ。このままだと私たち餓死しちゃうよ。』

ユリはいきなりの念話に驚いた様子なく、普通に念話で返してきた。
「実は俺達帰る家ないんです。」
すると、女の人は少し考えすぐに
「なら私の家に来ない？」
「いいんですか？」
「うん、いいよ。それにあなたたちを放っておけないからね。」
そのあと俺たちはその女の人の家に行った
女の人の名前はキリエ。そう、あの料理長でした。
そして俺たちはキリエさんの家で住むことになりました。

４年後

俺は今家から少し離れたところにある公園でユリと修業をしている。
ユリは蒼色の沁力を溜めて放出してきた。
「いくよ、貫け、蒼空一掃！」
蒼い光がこっちに向かってくる
この技は俺とユリで考えて作った沁力の結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系のどれとも違う系統で、魔法系と呼んでいる。
なぜ魔法系と言うかは、この魔法系の元になったのが魔法だから。
ユリは魔法も使えるんだけど、それは今は関係ないからいいかな

俺はユリの蒼空一掃を相殺することにした

「紅空一掃！」

紅空一掃は蒼空一掃とぶつかり公園の地面にヒビが入る。そして相殺されると、公園の地面は抉れ相殺された衝撃で周りの電灯は割る。

「よし、今日はこれくらいで終るよ。」

「そうだね、このあとどうする？」

とユリが言ってユリは結界を解除する

この結界を使うと中でビルや公園を破壊しても結界を解除すると何もなかったように元通りになる。でも人や生き物は元通りにはならない。そしてこの結界は使用者の選んだ人しか入ることはできない。結界の中は外と同じように時間が進む。例えば結界の中で1時間経つと結界の外でも1時間経つ。

「今日はこれからのことについて考えようと思ってる。」

「わかった、なら帰ろっか。」

ユリはそう言い、アリアに近づきアリアと手を繋ぎ歩き出す。

家に着くとキリエさんの声が聞こえてくる

「おかえりなさい。あら、いつも仲いいわね。」

「「ただいまー。」」

「私これから買出し行ってくるからお留守番よろしくね？」

「うん、わかった。」

俺がそう言うとキリエさんはものすごい速さで買出しに行ってしまった。

アリアとユリは自分たちの部屋に入り座る

「俺たちがこの世界に来て４年、この間に調べた結果原作まであと２年というのは大丈夫だよね？そして俺たちはまだ幽幻種と戦ったことも見たこともない。２年後に戦うことは決まってる、その時に幽幻種に苦戦するわけにはいかない。だから原作までの２年のうちに幽幻種と戦おうと思ってる。けれど幽幻種は居住区にはまずこない、そうなると幽幻種が出るところにいかないといけない。それをいつするかなんだけどいつがいい？俺はなるべく早く戦って強さを知っておきたい。」

アリアが言うとユリがすぐに

「原作まであと２年というのは大丈夫だよ。それと幽幻種は私もアリアに賛成かな。なるべく早く戦っておいて損はないと思う。だから近いうちに生態生育野（ビオトープ）に行って幽幻種を探しながら修業するっていうのはどうかな？私の転移魔法使えば生態生育野（ビオトープ）なんて一瞬だしね。」

ユリは神、ジテンに魔法を使えるように頼んだらしい。

元々ユリは魔法があるアニメの世界で最強の魔法使いだった。

なのでそのユリからすれば転移魔法など大したことはないらしい。
「じゃあ明日から修業は生態生育野(ビオトープ)でしよう。そこなら結界もいらないと思う。」
その後アリアとユリは雑談をしていた。

一週間後、生態生育野(ビオトープ)でアリアとユリは幽幻種を探していた。
「探し出して一週間かぁ…なかなか見つからないね。」
「幽幻種がそう簡単に見つかったら今頃浮遊大陸(オービエ・クレア)は滅びてるんじゃない？」
とアリアは笑いながら言う。
「そろそろ、休憩しない？」
もう2時間歩きっぱなしだ、俺も少し疲れた。
「すこし休憩して、今度は北の方を探してみよう。」
二人で休憩してると目の前の草むらがカサッカサッとなったので
俺は剣を沁力で具現化させ、ユリに言う
「ユリ！なにかいる！」
するとユリも剣を沁力で具現化させ構える

そして草むらから黒紫色の狼っぽいものが飛び出てきた
その狼は濃い紫色の霧を全身にまとってる――――
幽幻種だ

これがアリアとユリのはじめての幽幻種との出会いだった

幽幻種はアリアにむかって爪を振るう。それをアリアは具現化した剣で防ぎ幽幻種を蹴り飛ばす。幽玄種はアリア達から数メートル離れたところに着地した。着地した幽幻種は襲ってこず、その場で立ち止まっている。すると幽幻種は

Ｏｅ／Ｄｉａ＝Ｕ　ｘｅｐｈ　ｃｌｅｙ，　Ｄｉ　ｓｈｅｌａ　ｔｅｏ　ｐｈｅｓ　ｋａｏｎ

（■　■′……■　■′　■　■　■′……■……■　■）

森に呪詛を思わせる奇妙な音色が響きわたった。
幽幻種のまとう紫色の霧が輝きを放つ。幽幻種の周りの地面が急に紫色になっていき、腐敗していく。
「これが魔笛？！ユリ気を付けて！」

「うん、わかったよ。これが…魔笛なんだね、アリア！遠距離から攻撃するからアリアも一緒にお願い！」

確かにこれは近距離は危険だ。俺は幽幻種から距離をとる

「ユリ！タイミング合わせて！」

俺は紅空一掃を撃つために沁力を溜める

ユリは俺より少し先に沁力を溜め始めていた。
そして沁力が溜め終わり、ユリに言う

「準備完了！いくよ、ユリ！」

「「紅（蒼）空一掃！！」」

紅色と蒼色の光が幽幻種に当たる
幽幻種は周りの侵食されて腐敗している地面や樹を巻き込んで吹き飛んだ。幽幻種の中にある結晶が
パリーンとなって砕け散ると、幽幻種は蒸発するように煙となって霧散する。

「ふぅ…疲れた…」

「そうだね、疲れちゃった。」

「思ったより幽幻種は危険だね、それと一掃のおかげで腐敗していたものも消し飛んだりもとに戻ってるね。あれは沁力の塊みたいなものだから浄化もできるのかもしれない。」

「うん、浄化できるならすごく便利かもしれないね。あっ早く立ち去らないと天結宮（ソフィア）の人がくるかもしれないよ。」

「ユリ、転移おねがい。」

「転移、開始…」
ユリがそう言うと森には誰もいなくなった。

2話　いろんな出会い（後書き）

次は設定を紹介しようと思っています

3話・・・じゃなくて設定です

主人公

名前：アリア・ミルメスト

性別：男

容姿：黒髪でストレート、長さは腰より少し長い、瞳は紅く、
どこからみても女の子にしか見えないが、性別は男
そこらの女の子より可愛い

能力

身体能力は世界最強ＬＶ

魔笛：シェルティスの数倍の強さ、普通ならありえない沁力と魔笛が共存している。
なぜかアリアはエルベルト共鳴が起きない。なのでユミィやユリと触れることができる

沁力：世界で１番強い人の１００倍のはずが１０００倍ある（多分世界で１番の人は
サラだと思うのでそのサラの１０００倍）

戦いの才能：戦いに関することなら大抵のことができるようになる

才能

技術の才能：技術に関することなら大抵のことができるようになる

才能

沁力の術式の魔法系をユリと創作

魔法系とは現存している系態とは違い

その名のとおり魔法みたいな系態

名前：ユリ・ミストルティン

性別：女

容姿：金髪のストレートで腰よりすこし上位まである。瞳は蒼色

アリアより少し背が小さい。

能力

身体能力ほぼＭＡＸ

沁力：世界で１番強い沁力の人の２０００倍、つまりアリアの倍ある

戦いの才能：アリアとおなじ

技術の才能：アリアと同じ

魔力：リリなので言うとＥＸもしくは計測不能の領域

魔法：リリなのとは違う世界の魔法の世界で世界最強だった

沁力の術式魔法系が使える二人のうち一人
魔法系はアリアと創作

用語の解説　ｗｉｋｉから持ってきました

沁力
人が生まれつき持っている力。魔笛と反発し、浄化することができる。また、この力によって『浮遊大陸』は浮かんでいることができる。
用途によって、結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系がある。
アリアとユリには魔法系もある。

魔笛
本来、穢歌の庭や幽幻種が持っている術式。濃紫色をしている。様々な作用があり、単に有害なだけでなく、発狂（精神操作）する作用もある。

幽幻種（ゆうげんしゅ）
体内に魔笛を保有した、穢歌の庭に住む魔物。物理的実体は霧のような体の中にある核晶のみ。これを壊すことで幽幻種を倒すことができるが、非常に凶暴。
また、人に対して幻影を見せたり、幽幻種自身が増殖したり、人ではなく幽幻種に対して寄生する個体も存在する。

エルベルト共鳴
沁力と魔笛が互いに反発、共鳴しあう現象。沁力と魔笛、両方の力が圧倒的に強くなければ起こらない。
物理現象をも捻じ曲げ、電光のような火花が散る

天結宮（ソフィア）
浮遊大陸オービエ・クレアの中心に聳え立つ塔で、最上階は２９１階。
氷結鏡界を支える中心であり、そのための巫女や護士を養成する護法院。
階級順に護士候補生⇒正護士⇒錬護士⇒千年獅と、巫女見習い⇒巫女の隊員約１２００人と、備品の管理や彼らを補佐する職員およそ１万人で組織されている。

巫女
オービエ・クレアを守る氷結結界を張る巫女のこと。皇姫サラを筆頭に序列1位から5位までの計6人のことを指す。基本的に皇姫サラを除く5人のうち2人が結界の巡回を、残る3人と皇姫が結界を支えている。

巫女見習い
名前の通り、巫女の見習いのこと。一般人の中から選ばれる。天結宮の正式な隊員の証であり、巫女に続く階段でもある階級。

千年獅

結界の巫女につく専属護衛。錬護士の中から巫女の信頼が最も厚い者が選ばれる。皇姫の護衛は主天と呼ばれる。

錬護士
天結宮の護士の中でも精鋭が集まる階級。千年獅とほぼ同等の実力を有す。3年前、シェルティスがレオンと共に上り詰めた階級でもある。

正護士
天結宮の正式な護士で、巫女見習いと同じ階級。数年前まで正護士に選ばれるための制度は実績と実力のみが物を言うものであったが、制度が変更され、緊急時に部隊で協力できる護士が選ばれるようになった。

護士候補生
正護士になる前の階級。正式な天結宮の隊員でもない一番位の低い階級であり、一般人の中から立候補で選ばれる。

オービエ・クレア
地上から上空1万メートルに位置する浮遊大陸にして、この世界の名称。巨大な大陸と、無数の浮遊島（ラグーン）によって形成される。すべては１０００年前から巫女たちが唱える結界系沁力術式『氷結鏡界』によって支えられ、人はこの中でしか生活することができない。
浮遊大陸自体は以前から存在したが、１０００年前に氷結鏡界が張られる前は盛んに幽幻種が侵攻し、人々を襲っていた。
また、単一民族ではなく、様々な民族が混在する多民族地域である。

いくらかの区分けされており、『天結宮』を中心に外側へ向かって、『居住区』『自然区』『生態生育野（ビオトープ）』の３つ地区がある。沁力が発達する中で、航空機やスーパーコンピューターなど、科学技術も発展している。

わかりにくいかもしれませんがこれが限界です＞＜

3話・・・じゃなくて設定です（後書き）

アニメ化してないので場面を想像するのがきついです・・

用語はほとんどがｗｉｋｉからもってきていて、咲亜はほんのすこしだけ手を加えました。

4話　原作介入開始！！（前書き）

やっと原作1巻の内容が始まりました

4話　原作介入開始！！

アリアとユリが幽幻種と初めて出会い、戦ってから――――2年後――

この2年は今までどおり修業して、たまに幽幻種と戦うために生体（ビオ）生育野（トープ）に行ったりしていた。それとこの2年の間に技術の才能を使ってあるものを2つ作った。

そのある物とは、原作の主人公、シェルティス・マグナ・イールが持っている。――――今は違う人が持っている、機械（イリス）水晶をすこし改造したものである。イリスとはシェルティスが持っている機械水晶の個体名である。

俺たちは機械水晶を2つ作り、俺とユリで1つずつ持つことにした。俺の機械水晶の名前はティファニア、通称ティファと名付けた。ユリの機械水晶の名前はレインとユリが名付けた。

そしてアリアとユリが幽幻種と初めて出会い、戦ってしばらくしたあと

原作の主人公のシェルティス・マグナ・イールが第二居住区にやってきた。

シェルティスはキリエさんが営んでいるカフェテラス『二羽の白鳥』（アルビレオ）で働き出した。キリエさんは俺たちをシェルティスやシェルティスと仲の良いエリエとユトに紹介しようとしたが、俺たちは天結宮（ソフィア）に入るまで知り合いたくなかったので、キリエさんには俺たちのことを内緒にしてもらっていた。なので2年たった今もシェルティス達は俺たちの名前すら知らないし、いることも知らな

いと思う。

話は現在に戻り、今日は星礼祭が始まる日。つまり原作通りなら今日氷結鏡界が破られ、数百、もしくは数千の幽幻種が襲ってくる日である。

俺とユリは今広場で星礼祭の出店を巡り歩いている。俺とユリの胸の前にある機械水晶のティファとレインが首から下がっている。そして俺の手にはいちごと生クリームがぎっしり詰まった、食べかけのクレープがある。俺はそれを食べながら

「ユリ、今日だけど大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。ね、レイン。」

レインと呼ばれるとユリの首から下がっているレインは

『はい、大丈夫です。なので心配いりませんよ、アリア』

「氷結鏡界が破られるまで存分に楽しまないとね。」

せっかくの祭りなんだしね。それに、今日の事件が終わったら俺達は天結宮（ソフィア）に入るつもりだから、これからあんまり遊ぶことができなくなる。

「アリア、あっちも行ってみようよ！」

ユリはそう言い俺の手を取り走り出す。

その頃シェルティスは
「シェル兄、起きてー。お祭り始まってるよぉー！」
「……あと1時間だけ寝かせて。昨日遅くまで店の片付けしてて寝不足なんだ。」
「やーだー、早くいかないとお祭り終わっちゃう！　ほら早くー」
星礼祭3日間続くから今日じゃなくてもいいんだけど…
そう心の中で呟いて目を開けると悲しそうにしているユトと目が合ってしまった。
「シェル兄…一緒に、来てくれないの？」
「えっ…ええと……」
「ユトと一緒に行くの嫌い？」
「いや…そんなことは…ないけど……わかったよ、行くよ。」
僕はそう言いベットから飛び降りた。

皇姫に捧げる三日間の星礼祭は、第二居住区で行われる。
広場には星と月を描いた旗や浮遊大陸（オービエ・クレア）に吹く風を象徴とする風車と風鈴という儀式的な装飾。それよりやや庶民的な趣きが強いのが大

通りで、こちらは極彩色の風船やリボン、そして通りを埋め尽くす出店で賑わうのが一般的だ。

「おっ、本当に始まってるんだ。開会式前なのにすごいね。」

「あー、シェルティス！おそーい、待ちくたびれたじゃない。」

ツナギ姿の少女、エリエは右手にクレープ、左手にわたあめを持っていた。

「…さっそく楽しんでるね。」

「楽しみながら待っていたのよ、あっ、このわたあめユトにあげる。あとお小遣いあげるから好きなもの買ってきていいよ。」

しばらくして、

「エリエ、そろそろ祝砲の時間じゃない？」

氷結鏡界の祈り。皇姫の期間が終わり、結界の統制権が巫女へと壌渡される。それとともに天結宮（ソフィア）から祝砲が上げられ、星礼祭が正式に始められる。しかし———

「あれ、おかしいわね。」

「どうしたの？」

「えっとね、もう予定の祝砲時間すぎてるんだけど。」

祝砲がない。それはつまり氷結鏡界の統制権の譲渡が終わってない

ことを意味する。それは本来ならば有り得ないことだ。氷結鏡界の維持は浮遊大陸（オービエ・クレア）の存在に関わる一大儀礼。この譲渡に監視時間管理は何より厳格なはずだ。まさか何かがあった？

「……ユミィ」

シェルティスは巫女である少女の名を呟き塔を見つめる。

「そろそろ始まるよ。」

アリアが言う始まるは星礼祭のことではない。今日これから起こる事件のことだ。アリアがそう言うと居住区に念話が聞こえてきた。

『巡回中の巫女および千年獅の2組、お疲れ様。それに居住区の皆様、お元気？巫女のメイメルよー、突然だけどみんなにとっても大事なお知らせがあって、こうして念話でお邪魔させてもらってるわ』

「ユリ、準備いい？始まるよ」

「うん、大丈夫」

『突然の報告だけど落ち着いて聞いて――――――たったいま、穢歌の庭（エデン）を封じていた氷結鏡界が幽幻種に突破されたわ。』

すこし間があいてまた念話が聞こえてくる

『既に万を超える幽幻種が浮遊大陸（オービエ・クレア）を目指して上がって来てるわ。ハッキリ言うとあと一時間も立たないうちにこの浮遊大陸（オービエ・クレア）は幽幻種の大群に襲われる。』

また少し間が空いて念話が聞こえてくる

『現状は理解した？そこで居住区にいる住民の皆さんにお願いよ。今から３０分以内に緊急用の地下シェルターに隠れなさい。天結宮（ソフィア）の護士たちが、そこで命を張って防衛します。いいわねー？』

念話が中断するとアリアは呟いた。

「あー、緊張するなぁ。」

「そうですね。」

たしか原作だとこのあと皇姫のサラから”あと3時間くらいならわたしも氷結鏡界を一人で支えれる”みたいなことを言ってたはずだから、３時間以内に幽幻種を殲滅しないといけないのか。
個体の強さによるけど数百や数千なら3時間で終わるはず、というか原作だと終わってシェルティスが天結宮（ソフィア）でユミィと再会している。

「第三居住区に行くよ！」

そう言うと二人は緊急用の地下シェルターに避難せず第三居住区に向かって走り出した。

悲鳴や怒号が大通りに満ちていた。出店も何もかもそのままで逃げ出す者、はぐれた家族、恋人を探している者。その人ごみが避難シェルターの方向へ駆けていく。

「…最悪だ。思っていたよりもずっとひどい。」

「ね、ねぇってばシェルティス！あたしらどうすればいいのよ！？名メルって巫女様が言ってたとおりに避難するの？」

「一般人は従うしかないよ。」

シェルティスは昔、天結宮（ソフィア）で護士をしていた。そして穢歌の庭（エデン）に落ちた。その1年後シェルティスは浮遊大陸（オービエ・クレア）に戻ってきた。その後天結宮（ソフィア）から追放され居住区に逃げてきた。そこでキリエやエリエ、ユト達と出会ったのだ。

キリエはシェルティスが昔護士だったことを知っている。だからなのだろう、キリエはシェルティスに避難するのと言った。しかしシェルティスは自分のことを一般人と言った。

そういえばユトは一人で楽しんでいたはずだ。

「…とにかくユトを探さないと。」

「シェル兄ー！」

ユトがシェルティスを呼ぶ声が聞こえる。シェルティスは声が聞こえた方に向かって行く。すこししてユトを見つけた。

「ユト…よかった、ここにいたんだ。」

「シェル兄、この人たちどうしたの？」
慌てて逃げる周囲の人々をぽかんと眺める少女。星礼祭を楽しむあまり、巫女の話を聞いていなかったのだろう。
「ううん、いいんだ。それより早く逃げるよ、おいで！」
シェルティスはユトの手を握り早足で歩き出そうとし――――
「…えっ？シェル兄にげるの？」
ユトは手を握ったまま動こうとしなかった。
「うん、時間がないから後で説明するよ。とにかく避難シェルターに隠れないと。」
「ユト、シェル兄と一緒がいい」
「わかってる。一緒にシェルターにいてあげるから。」
「ううん、そうじゃないの――――」
ユトは首を横に振る
「シェル兄は、守ってくれないの？」
「――――え？」

「ユト、シェル兄と一緒ならシェル兄に守ってもらうのがいい。」

「…僕が？」

シェルティスは足を止める

「守ってもらうならユトはシェル兄がいい。シェル兄、前の公園でも守ってくれた……」

……僕が、幽幻種からだれかを守る？

……天結宮（ソフィア）から追放されて何もかも失って、もう巫女（ユミィ）と合うことすら許されない僕が？

「シェルティスどしたの？」

「い、いや……なんでも……ない、よ。」

「もう、シェルティスってば、突っ立ってないで早く行くよ！あたしたちの避難先ってたしか第6シェルターだよね。距離あるから急がないと。」

———避難？本当にそれでいいの？ただ守ってもらうだけで？

胸の中でなんどもなんどもこだまする自分の声。

もう天結宮（ソフィア）に関わることすら許されない。かつての幼なじみの少女は今や浮遊大陸（オービエ・クレア）を守る巫女。かつての友人（ライバル）も巫女を守る千年獅。二人とも浮遊大陸（オービエ・クレア）で崇敬される人物だ。

かたや自分は、もはや居住区に住む一般人。

自分にできることはただ一つ。ユミィが巫女として、レオンが千年獅として無事にやっていけることを居住区から祈るだけ。

……そんなこと、2年前に痛いくらい胸に刻んだはずなのに。

そのはずが、胸にこびりついて離れないもどかしさは何なんだろう。

「ユミィ……」

シェルティスは人の流れに逆らって振り返った。

———どこまでも多角伸びる白亜の塔を。

第三居住区

居住区の中で天結宮(ソフィア)から最も離れたところにあり、自然区と隣接した場所だ。商業が活発な第二居住区と違い、こちらは集合住宅がならぶ賑やかな住宅街としての色が強い。

その第三居住区には人影のただひとつも見当たらなかった。

「通りに人影なし。家も…だれもいねーな。とりあえずおおかた避難したか。」

しんと静まり返る街路を行く数重の足音

ロングコートにジャケット、ドレス。装いこそ異なるが、だれもが純白の儀礼服を纏っている。

———天結宮（ソフィア）の護士そして巫女候補生。

大剣、重鎗といった近接武器に加え、破砕弓、投擲機、銃火器。誰もが何かしらの武闘、沁力術式において浮遊大陸有数の実力者だ。

「静かー。ねえ爛（ラン）、いまなら勝手に家にお邪魔してもバレないかしらー？」

「メイメル、茶でも飲んで休憩か？まだ何も終わっちゃいないぜ。」

天結宮（ソフィア）の第二師隊。

しばらくして、メイメルに念話が来た。

「たった今、自然区と生態生育野（ビオトープ）に散っている巫女二人から念話がきたわ。」

「なんて？」

「抗戦中とだけ。とにかく幽幻種の数が多すぎて……『何千体かに突破された、居住区に向かってる。』と行ったきり交信を着られたわ。もう念話に力をまわす余裕もないみたい。万の幽幻種なんて……もしかしたら浮遊大陸（オービエ・クレア）は滅びるかもしれないわ。」

シェルティスは無人となった第二居住区にいた。

「さ、急ぐよ。遅れたらシェルターの扉閉まっちゃうんだから！」

エリエが肩で息をしながら声を張り上げる。

そんな彼女のすぐ後ろには、三輪ヴィークルがけたたましい起動音を吐き出して出発の時を待っていた。

通りに設置されている時計塔を見る。とっくに幽幻種が浮遊大陸（オービエ・クレア）に上がりきった時間だ。天結宮（ソフィア）の護士たちが居住区直前で防衛戦を張り、侵攻する幽幻種と抗戦しているはず。

……けど、本当に立ち向かえるのか？

……メイミルという巫女が言うには数千を超える幽幻種という話じゃないか。

抑え切れる数じゃない。せいぜい居住区の人間が避難するまでの時間稼ぎが精一杯。いや、あるいはその時間稼ぎすらもたなくても不思議じゃない。一躰でも脅威となる幽幻種、それが数千体以上。それも結界を破ったやつだ、通常の個体より強力なものがいると考えるべき。本当は一人でも火星が必要なはず。

「シェルティス？」

心配そうなエリエの声にも、ただ黙って頷くだけが精一杯だった。

”シェル兄は守ってくれないの？“

……なんでだろう、頭からさっきの言葉が離れてくれない。

突然、地面がひっくり返るほどの衝撃が走った。

ゴォォォッ……と唸る地鳴り。

一瞬遅れて、何か巨大なものが崩れた音が津波のようにやって来た。

「まさかッ――――」

振り返った方向は、はるかに離れた第三居住区。

数十階はあろう巨大なビルが内部から黒い霧を吹き出して倒れていく。

その周囲までも続けざまに家屋が崩れていく光景。魔笛に侵食されて腐り、ドロドロに溶け落ちていく。

「まずい、もうそこま――――」

言いかけたエリエが凍りつく

第三居住区の邦楽から風に舞い上がる濃い紫色の霧。

「霧なんかじゃなくて…あの点一つ一つがみんな幽幻種？」

空を真っ暗に覆い尽くす幽幻種の群れ。翼を持つ個体そのものは稀であるが、あの獣は身体を霧状にする特質を持つ。そして今、風は天結宮（ソフィア）へと吹いている。今幽幻種が風に乗れば、天結宮（ソフィア）の地上まで一気に侵攻出来ることになる。

「シェル兄、怖いよ。」

幽幻種の大群は第二居住区など眼中になかった。あの不気味な獣たちが侵攻するほうがくはただひとつ、天結宮（ソフィア）だ。

氷結鏡界を支える天結宮（ソフィア）。そこだけを目指して幽幻種たちは進んでいた。

…そうだよね。

「怖い…よね。」

きっと誰でも怖いはずだ。皇姫だって巫女だって、千年獅だって怖いはずだ。本当は誰だって逃げ出したい。

だけど、それでも――――

「ユミィは……逃げないんだよね。」

巫女は逃げない。最後の最後まで天結宮（ソフィア）を守り続けることが使命なのだから。

レオンもそうだ。あの男が退くはずがない。守るべき巫女が天結宮（ソフィア）にとどまる限り、命をかけて守り続けるのが千年獅の役目なのだから。

……あの日の約束も、そうだった。

”ユミィが巫女になって僕を守ってくれるって言うなら、僕だってユミィを守る千年獅になる。そうすれば一緒にいられるでしょ？“

”だから泣かないで、ね？だいじょうぶ。塔の1番高いところまで、絶対ユミィのところまでいくからさ“

――――そんな約束に憧れていた。

……行こう。

すこし離れたところから巨大なビルが倒れながら蒼色と紅色の光が見えた。そのひかりともに

ドゴォォォッ――――ン

巨大な地響きが聞こえてきた。しばらくすると周りのビルは跡形もなくなっており、その場所だけ幽幻種がいなくなっていた。

「二人とも、怖い重いさせてごめん。でも――――もう大丈夫だから。全部終わらせてくるから。」

「ちょっと！シェルティスどこ行くのよ！？」

「エリエとユトはシェルターに逃げてて。僕忘れ物取りに行ってくる。」

剣も友人も思い出も、何より大切な彼女との約束を。

二年前、全てあの塔に置いてきた。

――取り戻しに行こう。

「そうだよ。なにが追放だ。」

「シェルティス何勝手に歩き始めてんのよ、早くヴィークルに乗りなっての。」

「ごめん、僕のことは放っておいて二人は先に避難――」

「だ、か、ら、そうじゃなくて！天結宮（ソフィア）に行くんでしょ？それならさっさと乗りなさいっての。送ってあげるから。」

「――えっ？」

「ここから走ったって間に合わないでしょ。ほらユトもこっちおいで。」

ユトを後部座席にのせたエリエの姿を見てシェルティスは我が目を疑った。

「な、何言ってるのさ！上の幽幻種がどこ向かってるか見てみなさいよ。今の天結宮（ソフィア）は危ないなんてもんじゃにんだって！」

「だってシェルティス行くんでしょ。正直怖いけど、それなら付き合うわよ。」

「…ありがとう。」

「よし決まり。それじゃあ出発、天結宮（ソフィア）まで最速で突っ込むよ。」

「……エリエ、全部終わったらユミィのこと紹介するよ。友達になってあげて。」

「おおっ？！それ嬉しいかも！」

ヴィークルは動き出した。

「ふぅ…疲れた…」

「ふぅ…そうだね。どのくらい倒したかな？」

ユリがそういうと首にかかっていたレインが答える。

『およそ３００体くらいです』

アリアとユリがそう言っていると、二人の周りに幽幻種が沢山現れて、二人を囲んでいた。その数今まで倒してきた数と同じくらい……もしくはそれ以上、アリアは自分たちを囲んでいる幽幻種を見渡した。

「ユリ、一掃しよう。本気で撃てばこのくらいどうとでもなるはずだから。」

「そうだね、これ以上一体一体倒してたら疲れて死んじゃうしね。それじゃあカウントするよ？」

ユリはそう言うとカウントを始める

「10、9、8，7，6、――」

カウント共に風が巻き起こる。

「3，2，1…「「紅（蒼）一掃！！」」

周りにいる幽幻種に向かって飛び出す光、幽幻種にあたると幽幻種消滅していく。二人が一掃を撃ち終わると周りには何もなくなっていた。ビルも幽幻種もすべて。

「今の音はなんだッ！？」

爛は音がした方を振り返ると、蒼色と紅色の光が天高く伸び、その光が周りのビルを巻き込んでいる光景が目に入った。

「なっ……なんだあれは…あれは敵なのか？それとも味方か？」

光が無くなるとさっきまで明るかったのが途端に暗くなった。そして黒の空。幽幻種の体から噴き出す濃い紫色の霧によって太陽光が遮られ、周囲の視界がみるみる悪化していく。

1メートル先もみとせないほどの闇色に周囲が染まり…

『各位、邪魔な霧を吹き飛ばすから眩しいわよ』

メイメルからの念話

直後頭上を照らす猛烈な輝きに爛は両目を細めた。

メイメルの大規模な沁力結界が展開――――上空に停滞する霧をはじき飛ばす。

見えてきたのは何十体という数の幽幻種。大き者子猫から獅子まで、どの個体も霧状の身体から四肢が見え隠れする地上歩行型だ。

Ｏｅ／Ｄｉａ＝Ｕ　ｘｅｐｈ　ｃｌｅｙ，Ｄｉ　ｓｈｅｌａ　ｔｅｏ　ｐｈｅｓ　ｋａｏｎ

（■■、■……■■、■■■、……■……■■）

魔笛、幽幻種の有する特異の力だ。が――――

「遅い！」

魔笛の紫光が放たれるより先、爛は幽幻種の懐まで飛び込んでいた。人外とも言える反射神経と筋組織を有する少女の疾走は、その初速で可視速度を凌駕する。

爛は幽幻種に拳を叩き込む。

その拳は幽幻種のまとう霧をも吹き飛ばし、その奥にある結晶へと突き刺さる。

悲鳴を上げて消滅する幽幻種

「それにしても…狙いはあくまで天結宮（ソフィア）ってか？」

爛は一人で数十体は削ったし、いまも目の前には数躰の幽幻種。しかし厄介なのは自分たちを標的としていないことだ。常に自分たちを避けるように迂回して天結宮（ソフィア）へ向かって突進していく。現に、爛の知るだけで数十躰がこの防衛ラインを超えてしまった。

全体ではどのくらいの数が天結宮（ソフィア）に向かったかもはや数得ようという気も起きない。

それにさっきの蒼色と紅色の光も気になる。あんなものは今まで見たこともない。ただの一撃で周辺を吹き飛ばすほどの威力。

……今はそんなこと忘れておこう。今はまだ戦闘中だ。それにこれ以上通すわけにはいかない。

刹那、

「あ……っ……あ……？……ア……アアアアァァァ……ァァッッッッ！」

狂気に満ちた声。

両手に構えた双剣を周囲構わず振り回し、敵味方構わず斬り付ける。その後頭部に濃い紫色のきりがベッタリとまとわりついているのがかすかに見えた。

「……精神操作かッ！」

魔笛の作用の一つで、呪いを与えた相手を恐慌状態に陥れる力だ。直接死にかかわる能力でこそないが、混戦においては腐敗や猛毒以

上に危険な場合がある。特に感染者は鍛え抜かれた護士だ、錯乱状態で剣を振り回すだけで脅威となる。

幽幻種の侵攻を許すかたちになるが、この作用だけはまずい。焦る気持ちをこらえて部下に向き直り――

「いまは浄化なんてしてる場合じゃない。」

目の前に鳶色の神の少年がいた。

突然の乱入者に周りの退院たちが声をかける間もない。天結宮（ソフィア）の剣士が剣のことごとく紙一重で躱し、少年が一瞬でその背中へ回る。そして。

――とん。

後頭部を揺さぶるように殴打されその剣士は気を失って地に伏せた。

「混戦での精神操作ならとにかく気絶させるのが手っ取り早い。そうでしょ？」

にこりと微笑む少年

「え？…あ、ああ」

たしかに少年のやった方法は欄も知る方法である。だが同時に、天結宮（ソフィア）の剣士相手に背後をとって昏倒させる――それがどれだけ困難を極めるかも知っている。

それを、こいつはした。こいつはだれだ？
剣の攻撃範囲を知り尽くしたように攻撃を誘導し、流麗な体さばきで剣を捌く。あれと同じことができるものが千年獅を除いて天結宮（ソフィア）の中にどれだけいるだろう。
「おい！お前……」
ただものでないのは明らか。こいつは一体？
「――――じゃ、ここ任せたから。」
「あ、おい待て、てめぇ逃げんな！」
少年は逃げるように背をひるがえす。駆ける方向に明らかに改造を施した巨大ヴィークル。
「なにしてんのシェルティス！寄り道してる場合じゃないでしょ？！」
――――シェルティス？
その名前には聞き覚えがあった。それもごく最近。そうユミィが言っていた。
”シェルティスは、わたしの幼なじみなの“
「まさか…、おい、お前ユミィの――――っ！」

……まさかあいつが、穢歌の庭（エデン）におちたっていう。

「しぇーるーてぃーすー？急ぐのか寄り道するのかはっきりしてほしんだけど？」

シェルティスはヴィークルに飛び乗った。

「ごめん、天結宮（ソフィア）に入る前に使える武器がどうしても欲しくて。」

シェルティスという名前の少年はヴィークルに乗り天結宮（ソフィア）の方へと消えていった。

あいつは…シェルティスというやつはいったい…

今は敵に集中だ。爛は幽幻種へ向かって飛び出す。爛は幽幻種を拳で貫きどんどん倒していく。

「「「「あ……っ……あ……？……ア……アアアアァァァァ……ァァッッッッッ！」」」」

後ろの方から聞こえてくる狂気に満ちた声。もう聞きたくない声。しかも今度は3人もだ。

「ち、また精神操作か、それも3人も同時にかよ…」

爛は精神操作された部下に向き直り飛び出そうとした瞬間――――

――

シュッ――――とん、とん、とん。

とん、という音と共に精神操作された部下は倒れていく。おそらく気を失ったのだろう。

目の前には黒髪で腰より少し長くストレートで紅い瞳をしている可愛い少女が立っていた。

「い、いまのお前がやったのか？お前はなにものだ？」

同時に遠くから少女の声が聞こえてくる。

「アリアー！まってよぉー！」

遠くから走ってきた少女は金髪で腰より少し短いくらいのストレートで蒼色の瞳をしている。この少女も可愛かった。その走ってきた少女は黒髪の少女をアリアと呼んでいた。

「そこの黒髪の少女、お前がアリアか？そしてその金髪の少女、お前の名前はなんだ？」

するとすぐにアリアと呼ばれている少女は言った。

「俺は男だッ！！」

なっ、男だと……私より可愛いのに……

「私はユリ、ユリ・ミストルティンです。」

金髪の少女はユリと言うらしい。

「俺はアリア、アリア・ミルメスト。性別は男だ！」

やはり、アリアは男らしい……

それよりも――――

「お前、アリアとか言ったな。さっきのはなんだ？」

アリアは答えた。

「あれは普通に移動して後頭部を叩いただけだよ。」

「そ、そうか……って普通に移動ってなんだよっ！なんだよあれ！それにお前達は護士じゃないよな？お前たちはなにものだ？」

アリアとユリは白い儀礼服を来ていない。それにみたところ１０才も行っていないくらいの子だ。ただものじゃない。

「俺達は――――――」

アリアが答えようとした瞬間、幽幻種の声が響きわたった。その声に周りを見渡してみると数十体、もしかすると百以上の幽幻種がいた。その数に隊員は驚き、恐怖し慌て出す。しかしさっきやってきた二人は驚きはしたものの、恐怖したり慌てたりはしていなかった。

ユリがアリアに向けてだろう、一言言った。

「一掃するよ！カウント！5、4、――」

ユリは一掃するといい、カウントを始めた。この状況でするのだ。おそらく攻撃の準備だろう。

「わかった。」

アリアが一言言い、構える。構えたところにいきなり剣が現れ、その剣の先に光が集まっていく。

この光は――――沁力？なぜこの少年がこれほどの沁力を……と考えていると、カウントをしてい少女も剣を握っており、その剣の先に光が集まっていく。そして少年の光は紅色に光だし、少女の光は蒼色に光り出していく。

……この光は確か…そう、さっき遠くの方で蒼色と紅色の光がビルを巻き込み天高く伸びていた光と同じ色。まさか、さっきのもこの二人が？！

「2，1，0「「紅（蒼）空一掃！！」」

剣の先に集まった光が幽幻種の大群に向けて飛んでいく。その光にあたった幽幻種は次々に消滅していった。その光は幽幻種だけでなく周りの建物も巻き込んでいく。それを見た爛と爛の隊員は驚きを隠せなかった。

「な、なんだそれは！！」

爛は訳も分からず叫ぶ。

それもそのはず、自分たちが一体一体相手して倒していっていたのを百位の数の幽幻種を一撃で倒したのだ。

「これは沁力を使った魔法系の術式です。」

え？魔法系？なんだそれは……沁力の系統は結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系の５つしかないはず……

「魔法系ってなんだ？！沁力の系統は結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系の５つのはずだ。」

爛が聞くと今度はユリが答えた。

「魔法系というのは、私とアリアが創った新たな系統です。」

創っただと？しかもこの１０にも満たない二人が・・・

すると空に小型の竜ほどの大きさの大型の飛行型の幽幻種が飛んでいた。

「なんだ、あの幽幻種は……」

あんな大きさでしかも飛行型？あんなのが天結宮（ソフィア）にいったらやばい。

「あ、あれは、統率個体？！　ユリ！天結宮（ソフィア）に行くよ！」

「統率…？」

幽幻種は個々が独立した存在。小さな群れを形成した時だろうと、

そこに統率役の幽幻種がいたという報告は聞いたことがない。

「今回の幽幻種の行動は天結宮（ソフィア）の巫女と皇姫を狙うという極めて一缶した行動理念が見て取れる。氷結鏡界の譲渡する瞬間という氷結鏡界の弱点をついた結界突破から始まって、強力な個体を天結宮（ソフィア）への侵攻に集中させるなど、強力な統率意思が背後に存在すると考えられる。そしてこれがおそらく統率個体。」

「なるほど…な。」

「アリア！天結宮（ソフィア）行く準備出来たよこっちきて！」

ユリが言うと同時にアリアはユリに抱きつく。

次の瞬間二人の足元に奇妙な模様が現れた。

「じゃあ、ここ任せたよ。天結宮（ソフィア）は俺たちに任せて。」

次の瞬間、二人は光に包まれ消えた……

4話　原作介入開始！！（後書き）

なぜか異常にながくなってしまいました。

他の作者様に比べたら短いかもしれませんが、咲亜にとってはとても長い1話になりました。

今回はシェルティスたちの出番が多くてアリアとユリはあまり出番がなかったと思います。それと今回なぜシェルティスたちの出番が多かったかというと、それは小説の文を引き抜いたりしてたからです。

本当にダメな作者ですいませんm（__）m

次で、幽幻種侵入事件をおわらせることができればとおもっています。

できれば、アリアとユリが千年獅と巫女になるところまで行けたらいいなと思ってます。

5話　新たな千年獅と巫女（前書き）

これから頑張ってオリ主の出番を増やしていけたらなと思っています。

これから原作崩壊するかもしれませんが、崩壊するまではちょくちょく小説の内容を丸写しするかもしれません・・・

しかし！そこにオリキャラが入るとそれはオリジナルストーリーではないのか？と思ってしまいました。これは悪いことなんでしょうか？文才無い咲亜は小説を移すうちに少しずつ文才が・・・あがるといいです・・

ユリ「咲亜の話は置いといて、本編始まります！」

咲亜「ちょっとまって！私の愚痴を聞いてくれないかな……」

ユリ「えっ、な、泣かないでください。愚痴聞きますから」

咲亜「えとね…私の家自営業で居酒屋してるのね、すこし前までバイトしてたんだけど、親と一緒にいるのが嫌でバイトやめたのね。そして今日時給ＵＰするから働け！とか言ってきて、時給低いからやめたんじゃないんだけど…あんたを見たくないからやめたんだけど…って思ったんだ。それで嫌だ。って言ったら「今家族崩壊の危機なのに働かんのか！？」みたいに言われて、そんなんで家族崩壊するなら絶対しないで崩壊させてやるって考えていたら次は「家族が困ってる時に、手伝ってくれんなら、こっちもお前を困らせるしかないぞ？例えばＰＣのネット切るぞ？」とか脅してきたんです。それにあんたなんか家族じゃないんだけど？！って思ったの。それ

にこの父親らしきものは今まで私に酷いことしてきたので夏休みの時に家出してたくらいです。こんなの父親とかいえますか！？酷いと想いませんか？！その脅しのせいで…私の自由時間が…小説書く時間が…う、うわあぁぁぁーーーん……ぐす…」

ユリ「咲亜、よしよし、泣き止んで、そして筆持って続き書いてね。さて、それでは本編始まります。」

※愚痴を言ってる咲亜の文法が変でも許してください。本当に愚痴を言ってたらこうなりました。そしてこの愚痴は事実です。励まして欲しいです・・・

5話　新たな千年獅と巫女

天結宮（ソフィア）の護士から双剣を借り・・・奪ったシェルティスはエリエ、ユトとヴィークルで天結宮（ソフィア）に向かっていた。

疾走するヴィークルの机上で鞘を路面に投げ捨てる。青く煌めく氷の刀身――氷結鏡界の蒼氷を材質に用いた剣であり、それ自体が強力な沁力を帯びている。

「へぇ、水晶みたいで綺麗。天結宮（ソフィア）の護士はみんなそんな武器使っているの？」

「大体はね。とにかく沁力を帯びていないと幽幻種には効かないし。」

会話しているうちに天結宮（ソフィア）の敷地を駆け抜ける。敷地には芝生が敷かれており、その芝生はどす黒く変色し腐っており、外壁と防壁は溶け落ちていた。すでに天結宮（ソフィア）も幽幻種の侵攻を受けたのは確実。何体の幽幻種が潜んでいるかもわからない。

「で、どこ行くの？正面ゲートから一階に入っちゃう？」

「だめ。そっちは防衛ラインが敷かれているはずだから」

一回は全体が巨大なロビーだ。天結宮（ソフィア）に侵入した幽幻種を迎え撃つには一番効率がいい。鼠一匹許さない厳戒態勢が敷かれているはず。

「エリエ、次の分岐路を右！塔の外壁に沿ってぐるっと回り込んで！」

「あいよっと」

眼前を埋め尽くす巨大な塔を、外周をなぞるように機体が駆ける。

なにしろ直径だけで数百メートルを数える建造物だ。

「って、どこまで行けばいいのよ？正面ゲートじゃないなら東と西のサブゲート？」

「ううん……あ、いま見えてきた赤い扉！そこまで行ってヴィークル止めて！」

塔の横壁に取り付けられた両開きの扉。

「パス、変更されてないといいんだけど……」

とボラの脇に取り付けられた電子画面へ、数十桁に及ぶ複雑な解除式を入力。電子錠によって閉じられていた扉の密閉が解け、両開きの扉が左右に開いていく。

「ふぅん、昇降機（エレベータ）じゃないわよね、やけに外壁の作りが頑丈そうだし」

コン。横壁を叩いてエリエが反響音に耳を澄ませる。四方が壁に覆われた密閉空間。足元の床だけは淡い色合いのカーペット、残りの壁はすべて無機質な金属地だ。

「この機械音……これ、まさか射出機（カタパルト）？」

「うん、何百キロある積荷を２４０階のホールまで射出する機械砲台らしいよ。人用の設計じゃないけど今はそんなムチャもしなくちゃいけない状況だから。」

振り返るその先で、重厚な金属扉が口を閉じていく。

――――もう戻れない。

２４０階から最上階まで、あとは上がるだけ。

アリアとユリが転移した先は天結宮（ソフィア）の２９１階、そう最上階だ。

目の前には、蒼く輝く氷の世界がどこまでも広がっていた。

天結宮（ソフィア）の２９１階は『楽園』と名付けられた最上階。

天井も横壁もない、どこまでも延々と続く無限の空間がそこにはあった。

――――そう、まるで別世界だ。

遮るもののない頭上には白夜に似た光があふれ、青の輝きの下には大樹のごとくそびえ立つ蒼氷の氷壁がどこまでも連なる光景。氷壁の表面はあらゆる宝石よりも鋭く美しく研ぎ澄まされ、鏡のごとく世界を映す。

……息が凍る。

あらゆる防寒具も意味をなさない。あらゆる生物、あらゆる物質、そして幽幻種。全て例外なく凍てつかせ、その心と時を封印する沁力術式――――――氷結鏡界。

「思ったより寒い…」

寒気に耐えながら、蒼氷の連なる回廊を進んでいく。やがて氷の連峰が途切れる。と同時に、周囲を駆ける氷雪混じりの強風も静まった。

天結宮（ソフィア）の最上階『楽園』、その中心に水晶の形をした巨大な蒼氷結晶。

淡く透きとおった結晶の中心に、ひとりの女性が閉じ込められていた。

蒼氷の奥で、彼女の待とう純白の法衣がぼんやりと浮かんで見える

――――皇姫サラ

全てを凍てつかせる蒼氷に自ら身をゆだね、たった一人で氷結鏡界を祈り続ける女性。

「サラ、俺達は現時刻を持って、ユリは巫女となり、俺はそれを守る千年獅として活動する。」

――――――――アリア、ユリ、これからよろしくお願いしますね。

なぜこうなったのかというと、そう、それは1年くらい前のある出会いから始まった。

1年前の俺達は公園で結界を張って修行していて、いつもどおりの一日になるはずだった。しかしその日は違った。その日は結界の中には3人いた。そのうち二人は俺とユリ。で、結界の中にいたもう一人というのがサラだった。サラはどうやって結界の中に入ったのか走らないが、ほぼ最初から最後まで見ていたらしい。修行が終わるとサラが出てきて言った。

「あなたたちはとても強い沁力を持ってますね。それも私よりはるかに多い量の沁力を。見たところ天結宮(ソフィア)の人たちではないようですが、名前を聞いてもいいでしょうか？あ、私の名前はサラといいます。」

これが最初の出会いだった。

その時はすこし話をしただけだったけれど、それからちょくちょく会うようになった。そしてそれから何ヶ月か経った時のことだ。俺達は、数ヶ月後に氷結鏡界が破られ、幽玄種が襲ってくることをサラに伝えた。

するとサラは

「もしよろしければ、天結宮(ソフィア)で巫女と千年獅になりませんか？」

サラは俺たちの修業を何回か見ていた。そして俺たちの力を認めてくれたのだろう、俺たちを巫女と千年獅に誘ってくれた。

そう、これは普通なら有り得ないことだ。なぜなら巫女になるには普通最初に巫女見習いとして天結宮(ソフィア)に入らないといけない。巫女見習いになるだけでもとても名誉なこととされている。そして巫女見習いは数年を氷の中で仮死状態として祈り続けるなど、とても過酷な修業をし、巫女になるのが普通だ。しかし氷結鏡界を維持する結界巫女は皇姫サラを筆頭にして第一位から第5位までの計6人しかいない。

それに千年獅になるにはまず護士候補生にならないといけない。護士候補生は正護士になる前の階級で正式な天結宮(ソフィア)の隊員でもない。そして護士候補生から正護士になるには、少し前とは違い現在は、「褒賞システム」と呼ばれる制度を採用しており、その制度は任務などをこなし、褒賞ポイントを一定量までためることで正護士になることができる。そして正護士でやっと天結宮(ソフィア)の正式な護士となり、その上には錬護士と呼ばれる階級がある。錬護士は天結宮(ソフィア)の中でも精鋭が集まる階級で、千年獅とほぼ同じ実力を有しており、ここまでくるだけで数年はかかるはずだ。そしてそこからさらに巫女に選ばれないと千年獅にはなれない。

なのに、だ

サラは天結宮(ソフィア)にただ勧誘するのではなく、いきなり最上位階級の階級にならないかといってきたのだ。

俺達はこの世界に来た時から天結宮(ソフィア)に入ることを決めていたし、いずれ巫女や千年獅になろうと思っていた。それが今叶おうとしている。

そして俺はこう答えた。

「俺たちでいいなら喜んでなるよ、でも俺たちが天結宮（ソフィア）に入るのは今じゃなくてもいいかな？サラには今から数ヶ月後に氷結鏡界が破られ幽幻種が襲ってくること教えたよね。俺達はその時に自由に動きたい。だからそれが終わってからか、その事件の終わる直前まで待って欲しい。」

「はい、よろこんでお待ちしております。もしよけろしければ、天結宮（ソフィア）に入るとき私のところに来てくれませんか？」

「うん、わかったよ。ユリもそれでいいよね？」

「うん、それでいいよ」

というようなことがあった。

「さて、これからどうしようか…」

「うーん、やっぱり――――――――――」

ユリがしゃべっている途中に天結宮（ソフィア）が震えた。

「もしかして、この音って！」

「アリア、下の階にいる巫女のところに転移するからこっち来て！」

アリアはいそいでユリに触れるくらいの距離まで近づいた。そして二人の足元には奇妙な模様が浮かび上がっている。この模様はユリの前いた世界で言うと魔法陣とよばれるものである。

「転移、開始…」

魔法陣が光り、二人は光に包まれていく。光が収まると楽園にはサラしかいなかった。

———あの子たちを頼みましたよ

サラの呟きは誰にも聞かれず楽園に響きわたった。

時は天結宮（ソフィア）が震える少し前に戻る

シェルティスは２４１階でレオンと会いレオンから数年前までパートナーだった機械水晶（イリス）を受け取り、２８１階の大聖堂を守る巫女二人を助けるため上を目指して２８１階まで来た。シェルティスは途中の階の幽幻種を倒しながらここまできた。双剣を両手に持つ少年の右肩と背中には骨に到達するまで幽幻種の爪にえぐられていた。

そして、今シェルティスは思わず見上げるほどの巨大な扉の前にいた。

荘重かつ鮮やかなレリーフがほどこされた金属製の扉。その扉が青く淡い輝きに満ちていた。

「沁力で守られた扉？」

『……鍵はかかっていません。扉を開けてみてください。』

言われるまmが二扉の取っ手に手をかざし。

———ヂヂ……ヂッ！……———

「っ……なっ……！」

突如、雷光を思わせる青白い火花が迸った。その衝撃に吹き飛ばそうになるのをかろうじて堪える。いま、たしかに扉に手を弾かれた。

「……まさか、エルベルト共鳴……！？……こんなときに……！」

白く火傷した手の傷も忘れ、シェルティスは眼前の扉を睨みつけた。

エルベルト共鳴。

真逆の属性を持つ人の沁力と幽幻種の魔笛———そのなかでも、特に強力な沁力と魔笛同士が接触した場合に生じる現象だ。二つの力が磁石の同極のようにお互いを拒絶し、物理法則をもねじまげて強力な火花が放出される。

大聖堂の扉は氷結鏡界の力を受けるように設計されている。つまりこの扉自身が強力な沁力結界として機能している。

そう、弾かれた理由はシェルティスの身体に宿る魔笛が強すぎるから…

そして、天結宮（ソフィア）が震えた。

ゴッ、とい地鳴りと破砕音。振動はすぐ真正面、大聖堂の内部から。まるで大砲が天結宮（ソフィア）の外壁で着弾したような激震だった。

「まさか……」

『統率個体です。外壁を食い破って大聖堂の内部に侵入した模様――』

「――ユミィっ！」

喉を枯らして叫ぶも、固く閉ざされた扉を前にしては届かない。そう届かない。声も、自分の思いも何もかも。

「……イリス！」

懇願するような気持ちでイリスに向かって叫んだ。

「イリス、何か方法は？！なんでもいいんだ、なんとか扉を開ける方法は？！」

『あるとすれば、、あなたの身体を蝕む魔笛が消え去るか、あるいは逆に、この扉を守る沁力と同等の、つまり氷結鏡界と同等の魔笛をもってすれば……でも、そんなものあるはずが――』

…氷結鏡界と同等の魔笛。

そういえば、ユミィから聞いた覚えがある。氷結鏡界を支える皇姫と巫女には、結界を維持する祈りの歌があるのだと。はるか上空へと続くことから天結宮（ソフィア）とよばれる塔。その最上階で奏でられる旋律（コード）だからこそ、その歌は『第七天音律（ソフィアコード）』と名付けられているのだと。

究極の沁力結界である氷結結界と、それを作動させる歌。

それと同等のものがあるとするならば、それはきっと穢歌の庭（エデン）そのものの――――――

穢歌の庭（エデン）の……旋律（コード）……？

「……ある」

『シェルティス、いま何と？』

……あるじゃないか。穢歌の庭（エデン）の最奥まで落下した時のこと。

あの日、

世界の終りの場所で――――

確かに僕は、穢歌の庭（エデン）に流れる歌声を聴いていた。

「ある。…あるよ、イリス。」

『シェルティスどういうことですか？まさか』

「――――――見つけたんだ、この扉を開ける方法。」

そう、答えはあの時、

落下した穢歌の庭(エデン)に答えはあった。

魔笛(メロディー)――――――『第七真音律(エデンコード)』

Ｏｅ／ Ｄｉｘ ｏｌｅ ＝Ｅ，ｐｉｌｅ ｎｏａ ｍｙｉｚｉｓ
ｅｇｉｃ
（夢、理想の空隙へ沈み）

Ｏｅ／ Ｄｉｘ ｓｈｅｌ＝Ｅ，ｃｒｏｓｓ Ｋｙｅｌ ｓｏｌｉ
ｔ ｘｅｓ Ｍｉｑｉｓ Ｉ
（願、現世の孤独へ帰る）

その瞬間。

大聖堂の内部に侵入していたすべての幽幻種の動きが止まった。

ｃｌａｒ ｄａｃｋｔ， ｍｉｈａｓ／ｘ－ｍａｄｅｌ，ｅｌｍｅ
ｉ ｕａｌｅｎ ｌｉｈｉｔ ｔｉ－ｏｙｕｌｉｓ
（歌潰え、絆は断たれ、祈りの一切空虚を望み）

Ｓｅｒａ，Ｘ ｅｌｅ ｓｌｉｎ ｋｙｅｌ ｃｉｅｌｉｓ ｃｌ
ｅｙ
（そしてまた、わたしも彼方の地へと旅立とう）

ｘｅｏｓ ｌｏａｒ ｓｉｓ ｆｌａｎ－ｓ－ｋｅｅｎ，Ｎｅｌｓ

is hiz tinny xes rirís tes Zal
ah
（夜のかぜは　冷たく、鋭くそれは約束と福音の物語）

kamis wire／x－gorn zay nazalis
rel
（罪色の雨は、記憶の筐を錆びつかせ）

Nid hiz loar nec cross－Oz－yuli
s noa missis ciel
（もはや帰ることのない風は、遥かなる彼方へと消えていく）

ユミィは大聖堂に聞こえてきた旋律（コード）に聞き入っていた。

Oe／kypne Xe yahe，ria ole／en－da
ckt stery
（眠れよ我が身　全て千々に潰えた夢のため）

Oe／iden Xe uirse，ria elmei ua
len
（沈めよ我が時　全て一切の祈りのために）

Oe／kills Xehaul，ria mihas／x－ma
del zayxus
（凍れよ我が灯　全て永劫に断たれし絆のために）

……うそでしょ

旋律でも詩でもない。それ以上にユミィはその歌の『声』にみみを澄ませていた。決して幽幻種のものじゃない。

「……うそ、だって……」

すぐには信じられなかった。なぜならばその声は、自分のよく知っているあの少年のもので――――

＝Ｅ　ｍｉｌｌｅ－Ｙｅ－ｋｙｐｎ　ｐｈｅｎｏ　＝Ｅ　Ｍｉｌｌｋｉｓｓ　ｈｉｚ　ｑｅｌｎｏ，ｂｅｌｉｔ　ｅｌｍｅｉ　Ｅｄｅｎ　ｃｉａ　ｉｄｅｎ

（さぁ　生まれ眠る子よ　見届けなさい、楽園の全てが沈んでも）

ｒｉｓ－ｉａ　ｓｏｐｈｉａ，Ｘ　ｅｌｅ　ｄｉａ　ｋｙｅｌ　ｒｉｒｉｓｉｓ　Ｕｌｓ

（それでもなお、近いの丘へと私は歩く）

俺は今大聖堂の内部に転移してきて隠れている。そして俺達は旋律（コード）に聞き入っていた

そして、重々しい音と共に、大聖堂の扉が開いていく。

氷結鏡界に限りなく近い結界を張り巡らせた扉。幽幻種では絶対に開けられないはずの聖なる扉が、自ら封印を解いていく。

今シェルティスに顔を知られるのはやめておきたい、原作ではシェ

ルティスは戦いが統率個体との戦闘が終わりユミィと会話したあと気を失うはず。俺達はそれまで隠れておくことにした。

Ｏｅ／ｓｉａ　Ｅｄｅｎ，　Ｏｌｅ　ｅｌｅ，　Ｓｅｌａｈ　ｐｈｅｎｏ　ｓｉａ－ｓ　Ｏｒｂｉｅ　Ｃｌｅｙ
（全ての夢見る世界のために）

開放された扉のそのさきに、たった一人の少年が立っていた。

ゆっくりとその少年がユミィの方へ振り向いた。

「ごめん、ユミィ。ずっと……またせて。」

やばい……ものすごい感動する場面だよ…涙出てきたよ…どうしよう…

ユリの方をみてみるとゆりも泣いていた。

やっぱり小説読んだ時と違って実際にその場面にいると感動とか全然違うね。

「……あ……ぁっ…」

まぶたから何かがこぼれ、視界がぼやけていく。

涙が止まらない…ずっと、我慢していたのに。m値の中、張り詰めていた何かがぷつんと途切れたのがわかる。まだ何も終わってないのに…彼がそこにいるだけで、とても大事な何かを守れた気がした。

双剣の少年。自分を守る千年獅になると行ってくれた彼。

シェルティス・マグナ・イールが、立っていた。

5話　新たな千年獅と巫女（後書き）

な、ながかった・・・そして、幽幻種侵入事件　終わりませんでした。

私はちゃんと19時から書き始めたんです。なのに途中でどうやってアリアとユリを千年獅と巫女にするか考えたりして書いてたら11時30分をすぎていることに気づき、一旦切って投稿しました。

だって一日一回更新したいんです。

それとおもったんですが、オリキャラのイメージを描いてみようかなと思いました。その理由は、物語を考えてるとき（妄想してるとき）オリキャラのイメージがあると場面の想像とか動いてる映像が想像しすいからです。

でも咲亜は絵の才能も文才もないので絵は書いてみて100点中30点以上とれたら載せてみようかなと思っています

これからもよろしくお願いします。

次の話で幽幻種侵入事件は終わると思います・・・

6話　世界が原作と変わってきてる？（前書き）

えっと、咲亜です。

5話に漢字変換ミスとキャラの心の中での喋り方が少し可笑しいかな？と
おもったので修正しました。なので内容は変わりませんので読み直さなくても大丈夫です。

これからもよろしくお願いします。

では本編6話はじめます。

6話　世界が原作と変わってきてる？

大聖堂の扉が開いた。

シェルティス・マグナ・イールが、立っていた。

そして、凍てついた時が動き出す。

幽幻種の魔笛が再び流れ、禍々しく輝く光の奔流が大聖堂を照らし出す。だが双剣の少年は、それより早く大聖堂を駆けたいた。

二条の剣閃

右の剣で放たれる魔笛と障壁を破砕し、左の剣で幽幻種の核晶を打ち砕く。魔笛による障壁を完全に無効化されたことに、残る幽幻種からは動揺のざわめき。その虚をついてさらに左右の二体、さらに背後の1体の核晶を破壊する。

次々と少年が幽玄種を打ち倒していき、幽幻種次々と消えていく。

残るは統率個体。

だが少年が振り返った時、いるはずの巨大な幽幻種は忽然と消えていた。

「……消えた？」

春蕾（シュンレイ）が当たりを不安そうに見つめる姿。音も無く消えた統率個体。どこに逃げた？離れてみていたユミィにもわからなかった。そう、

今もなお誰にも気づかれずに隠れてみている二人以外はだれもわからなかった。

ばさっ。大聖堂に開いた壁穴の先、巨大な羽ばたき音が聞こえたのはその時だった。

『大聖堂の外です。この場は諦め――――――最上階の皇姫を狙っています！』

少年の胸元でイリスが激しく点滅。

氷結鏡界に集中した皇姫は完全な無防備。……サラ様が攫われる。誰より浮遊大陸（オービエ・クレア）を憂い、自らを犠牲に氷結鏡界を支えてきた人が……

私とアリアは今も隠れて見ている。

すると、統率個体がシェルティスやユミィ、春蕾に気づかれず外壁のそとに飛び出した。もしかして、サラのところに向かうのかな？もし、向かってるなら助けたほうがいいかな？とか考えていると

「もしあの統率個体が最上階に侵入したらすぐ倒せるように転移の準備だけしておいて」

アリアも私と同じことを考えていたようだった。助けてあげたいけどシェルティスにはなぜここにいるかは言えないから、だから本当の本当に危険な時、シェルティスたちがどうしようもなくなった時以外はみていようと思っていた。

だから私はアリアだけに聞こえるような小さな声ですぐ答えた。

「うん、わかった」

私たちは会話していた時も場面は進んでいた。今はイリスが統率個体の場所を叫んでいた。そしてユミィが叫んだ。

「――――シェルティス！」

私はこのままだとどうなるか、そう悟った瞬間、私は目の前の少年にむけて叫んでいた。

一度は天結宮（ソフィア）を追放された少年。そんな彼にこんなこと願うこと自体、どれだけ自分勝手なことかは分かっている。なんて都合の良い願いなのかも分かっている。

……それでも、頼らずに入られなかった。

この場でそれができるただひとりの人間だから？ううん、違う。……たとえこの場にレオンがいても爛がいても、わたしは……目の前の彼に頼りたかった。

巫女は自分の全てを、ただ一人の千年獅（パートナー）に託すものだから。

――その意味が、ようやくわかった。

「シェルティス……お願い！」

だから私は叫んだ。

ずっと探してた、自分の全てを託せる少年に向けて。

「サラ様を……ううｎ、みんなの浮遊大陸（オービエ・クレア）を……守って！」

その少年は自分に向かって振り返った。目止め、視線と視線が重なって――――――

……シェルティス、笑ってた？

一瞬の余韻を残し少年は壁の大穴から天結宮（ソフィア）の外へと身を躍らせた。

高度二千メートルの空域、天結宮（ソフィア）の最上階へと飛行する幽幻種を追いかけて。

シェルティスが外に飛び出したときにどこからか「わぁ～」と聞こえたような気がしたけれど、ここには私とシェルティス、春蕾しかいないはず。だからたぶん聞き間違えだと思う。

あ、危なかった…さっきは思わず声出ちゃったよ。だって、本の中なら「へぇ〜がんばるね」と軽く流せるんだけど、実際見ると驚きが多すぎて……

それは置いといて。今シェルティスが外から戻ってきた。シェルティスの身体を見ると腕からは血がドクドクと流れておりとても痛そうだった。けれどシェルティスは自分の幼なじみのユミィを見て声を発した。

僕が統率個体を倒し、大聖堂に戻ると大聖堂の内部は決して平穏な状況とはかけ離れたものだった。足元の絨毯は腐食して剥がれ、天井の照明器は濁った黒色にただれている。壁の燭台も魔笛の神職を受けて半ばで折れている。

———でも、間に合わなかったわけじゃない。

部屋の中心で、ユミィは着物姿の巫女と共に立っていた。直接的な外傷はもちろん、魔笛を浴びた九通からも今は回復したようだった。

そう、守れた。自分の一番大切な彼女を。

けれどなぜだろう。全て終わったはずなのに、胸を締め付ける緊張がおさまらない。いやむしろ、こうして彼女を前にしている方がはるかに———————

「あ、あのさ……」

シェルティスはしっしに声をしぼりだした。

「……無事で……よかったよ、本当に」

違う、違うんだ。言いたかったのはそんな言葉じゃない。そう分かっていても、口にできたのはそんな平凡なものだけで。けれどそのp半面、そんな拙い言葉だけでも伝えられたことが嬉しくて。

「……」

少女は下をむいたまま答えない。

「そう……だよね。ユミィは巫女だものね。きっと、こうして言葉をかけられるだけでも……一般人の僕には出来すぎたことだよね。」

未曾有の災厄から天結宮（ソフィア）を守ることができた。ユミィも無事だし、彼女が氷結鏡界を支えれば浮遊大陸（オービエ・クレア）は助かる。天結宮（ソフィア）から追放された自分にとっては出来すぎた成果だ。

……本当は、もう一度全部やり直したいって伝えたかったけど。

この場では伝えられない。自体が全て終息して、天結宮（ソフィア）の機能が落ち着いてからだ。外部の人間である自分が大聖堂に長いはできない。

「ユミィ……ごめん、僕が天結宮（ソフィア）にいたらまずいんだよね。すぐ……帰るから」

大聖堂の扉へ、巫女二人に背を向ける。

「……行かないで」

それがユミィからの言葉だと気づいたのは、ふるえる唇を必死に動かそうとする彼女の姿を見たからだった。

「ば、ばか……シェルティスのばかっ！　なんで……なんで……」

「ずるいよ……やっと来てくれたと思ったのに……何も、言わ……っないで……なんでまた、どこか行っちゃおうとするの？！　わたし……ずっと待っていた……のに」

「……ユミィ」

「おかえり……ようやく、来てくれたんだね」

両手を広げた少女が、微笑の眼差しでゆっくりと歩いてくる。静かな大聖堂で、二人は互いに手を伸ばし。その指先が確かに触れた――――――その刹那。

少年と少女は、全く同時に二年前（あのとき）の悲劇を思い出した。

――――ヂヂ……ヂッ！……――――

二人をつなぐ手と手の間に雷光さながらの青白い火花が迸った。

エルベルト共鳴。

強すぎる沁力と魔笛が重なったとき、それは物理減少をも捻じ曲げて待機中に放電現象として現れ、接触した者たちを炎で裁く。

――――ヂヂ……ヂッ！……――――

重なる指と指を、雷光さながらの火花が容赦なく灼き焦がす。

「ぁ……っ！」

悲鳴にもならない声を上げて、少女がその衝撃で吹き飛ばされた。

「ユミィっ！」

「……あ……ははっ……」

返事は、乾いて錆び付いた笑い声だった。

「……二年前と……これも、――――――――」

俺とユリはしばらく二人のやり取りを見ていた。これで幽幻種侵入事件は終わった。そう思っていた時だった。

グォォォォッ――――――

大穴が開いた壁からさっきの統率個体より大きい竜型の幽幻種が入ってきた。シェルティスがユミィを守るように少女の前に立ち双剣を構え幽幻種に向かって駆ける。

……原作と変わってきてる？これもイレギュラーのせい？それとも俺たちがこの世界に来たから？

そういえば、幽幻種が氷結鏡界をを破って侵入した数も原作より多かった気がする。

「ユリ！緊急事態だ！でるよ！」

「私は巫女二人を守るから、アリアはシェルティスと幽幻種をお願い！」

「わかった」

俺とユリは巫女二人とシェルティス、幽幻種がいるところに向かって走り出した。

シェルティスは双剣で幽幻種に切りかかるも双剣は弾かれ、幽幻種に殴り飛ばされたっていうのかな？とにかく吹き飛ばされて、巫女、ユミィと春蕾がいる方へ飛んでいった。俺は走っているスピードを上げ、シェルティスと巫女二人の間で止まった。

「シェルティス！」

後ろでユミィが叫ぶ、と同時にシェルティスが飛んでくる。俺はシェルティスを受け止めようとした――――――

そう、俺は忘れていた。俺達はサラより強い沁力を持っていることを、シェルティスは強い魔笛を持っていることを…

俺がシェルティスを受け止めようとした瞬間

――――ヂヂヂ……ヂッ……バリッ……バチッ……――――

エルベルト共鳴。

さっきのシェルティスとユミィのエルベルト共鳴の比でないほど強力な青白い火花が出る。

「……っ！」

あまりの激痛にすこし声が出てしまった。シェルティスは気絶したようだ。それほどエルベルト共鳴が強かったということだ。

「あなたたちは一体…それにあのエルベルト共鳴…」

後ろからユミィが聞いてくる。シェルティスが気絶して話を聞いていない今なら話ができる。ユリもそう思ったみたいだった。

「私たちはあなたたちの味方です。私は六人目の巫女、ユリ・ミストルティンです。そしてそっちはアリア・ミルメスト。私の千年獅です」

「アリア・ミルメストです。六人目の巫女の千年獅です」

なぜか丁寧口調になってしまった。

「それとなぜさっきより強力なエルベルト共鳴が起きたかというと、――――――話はあとでします。先にあの巨大な幽幻種を倒さないと――――――」

話している途中に巨大な幽幻種まず巨大な雄叫びをあげ、次に魔笛をとなえはじめた。

シェルティスが勝てなかった幽幻種だ。魔笛もとてつもなく強いものだろう。だとしたらその魔笛が発動する前に倒すのが賢明だ。俺は直ぐ様幽幻種の方へ向き変える。

「魔笛っ！？」

後ろで何か言ってるけれど、俺はシェルティスの双剣よりすこし大きい剣を具現化させる。現れた剣は、どことなく聖なる気が漂っている。そしてその剣はシェルティスの剣と違い、水晶のように透き通ってはいなかった。

アリアは剣を片手で構え走り出す、しかし走り出してすぐにその姿が消えた。次の瞬間には幽幻種の目の前にいた。アリアは剣を両手で握りいともかんたんに首を切り落とし、幽幻種の核晶を貫いた。

核晶が砕けた幽幻種は霧状となって消滅した。アリアは剣を消し、ユリたちの方へ歩き出す。

私は今見たことが信じられなかった。

最初は、六人目の巫女を名乗る人が現れて、その千年獅も現れた。そしてなによりその千年獅が突き飛ばされたシェルティスをキャッチしようとしたらエルベルト共鳴が起きた事。

エルベルト共鳴は強い沁力と魔笛が重なり合うと起きる自然現象。

そのエルベルト共鳴は私の時よりも強力で、千年獅の少女アリアちゃんは激痛のあまりかすかに声を上げていた、シェルティスは激痛で気を失っていた。

千年獅の少女は剣を作り出し、構えて幽幻種に向かって走り出した。そして消えた。次見えたときは幽幻種の目の前で、アリアちゃんによってすぐに幽幻種は消滅した。

アリアちゃんは歩いてこっちに戻ってきた。

———アリアちゃんは私より強い沁力を持っていて、シェルティスよりも強い

とても幼い少女二人が私たちを助けてくれた。

「わたし…あなたたちのこと……しら…ない…」

春蕾は私たちを助けてくれた二人のことを知らなかった。

私も二人の事は知らない。もし本当に巫女と千年獅なら、私たちは知っているはず、それにこの年で巫女や千年獅になれるものなの？そういった考えが頭の中を駆け巡る。

「えっと…私たちは、さっきサラに……サラ様に巫女と千年獅にしてもらったんです。」

えっ、今ユリちゃんは一回、サラ様のこと呼び捨てにしなかった？それにさっき巫女と千年獅になったって……どういうことなんだろう…

「えっと…ユリちゃん、巫女と千年獅にしてもらったってどういうことなの？」

「私たちは巫女見習いや錬護士などは飛ばして、巫女と千年獅にしてもらったんです。してもらったと言うか…サラに巫女と千年獅になりませんか？って言われてですけど」

…そんなことあるの？それにサラ様のことをもう普通に呼び捨てで呼んでる。もしかしてサラ様の知り合いの人なのかな？

「サラ様の知り合いの人とかですか？」

私は思い切って聞いてみました。すると答えてくれたのはアリアちゃんでもユリちゃんでも、ましてや春蕾でもありませんでした。そう答えてくれたのは———

『はい、アリアとユリは私の知り合いです。その二人は私が巫女と千年獅に誘いました。』

「えっ、さ、サラ様、どうしてここに！？」

私は驚きすぎて何を言ってるのかわからなかった。

「あ、サラ、これから巫女と千年獅全員集めて、俺達のことや、挨拶したいんだけど。よかったらみんなを呼んでくれないかな？　それとユミィ、これは念話だから「どうしてここに？！」っていうのはおかしいと思うよ」

『そうですよ、ユミィこれは念話です。なのでその言い方は変ですよ。それはまぁいいでしょう。巫女と千年獅を全員呼べばいいんですね？』

「うん、任せるね」

私はさらに驚いた。だっていきなり現れた千年獅アリアちゃんは自分のことを俺と呼び……そのことじゃなくて！アリアちゃんとサラ様が普通にタメ口で会話をしていることに。

それとアリアちゃんは可愛いんだから俺とか言って欲しくないかな。

「アリアちゃん、せっかく可愛い女の子なんだから、俺とか言わないで私って言ったほうがいいと思うよ」

私がそう言うとアリアちゃんはなぜか顔を赤くして叫んだ

「お…俺はお、と、こ、だ！！」

え、今アリアちゃんが自分のことを男の子って言ったような・・・

でも、こんなに可愛い男の子がいるはずが・・・

「ここにいるから！！」

あれ、今私なにもいってないよね、心読まれた？！

「俺は男なの。」

「それはいいとして、巫女と千年獅を全員集めるんだよね？なら違うところがいいんじゃないかな？」

そうだった。これからちゃんとした発表があるはずなのだ。でもシェルティスはまだ眠ってる。どうしよう…

するとアリアがまた私の心を読んだのかな、

「俺達はシェルティスにまだ知られるわけにはいかない。だからシェルティスは救護階へ。なぜ知られたらいけないのかは後で話すよ。それにユミィはシェルティスとはこれから何回も会うことになると思うよ」

「うん、わかった。それと、私がシェルティストこれから何回も会うことになるっていうのはどういうことなの？」

「それもあとで話すよ」

そしてシェルティスは救護階へ、私たちは２６９階にある会議室へ向かった

俺達は２６９階Ｆ会議室で３０分位待ちやっと全員揃った。みんな疲れていて何人かはところどころ怪我をしている。そしてみんな俺とユリの方を見ている。確かに巫女と千年獅が全員集められて、まだ巫女と千年獅になった俺たちのことを知らない人から見れば、部外者だろう。

そして千年獅の一人が話しかけてきた。そう、あの時あった娘だ。

「あ、お前は！　さっきは助かったぜ！けどなんでここにいるんだ？」

「爛、この二人の少女のこと知ってるのか？」

レオンが爛に聞く。そうアリアにとって禁句を交えて

「俺は男だー！！！」

「「「「「え！？」」」」」

え……みんな驚かないでよ…確かにすこし女の子っぽいけどさ…俺……男……だよ……？

どうしよう…悲しくて涙出てきた……

「ぐす……ぐす…う、…う……」

俺はサラ様に呼び出され、２６９階Ｆ会議室に来ていた。そこには巫女と千年獅が全員集まっていて、さらに知らない二人の少女がいた。

そして俺はただ、爛にこの二人の少女知ってるか？　と聞いただけだ。そしてその少女の一人が俺は男だー！！！と言い、思わず　えっ？！　と言ってしまった。

すると少年？は泣き出してしまった。

これは俺のせいなのだろうか。

そう考えていると知らない二人の内の少女のほうが少年？に抱きついて、「アリアは男の子だよ、私がそう知ってるから、泣き止んで」と頭を撫でながら慰めていた。

すると少年…アリアと呼ばれていたのでその少年の名前はアリアなのであろう。アリアはすぐに泣き止みしばらく少女と抱きついていた。そしてこの状況がいつまで続くのかと思い出した時

『みんなそろったようですね。それにアリアは災難でしたね。そしてなぜ巫女と千年獅であるあなたたちを全員呼んだかというと、あなたたちにこの子達を紹介したかったからです。　ではアリア、ユリお願いしますね』

サラ様がそう言うと、二人は抱き合うのを止めユリと呼ばれた少女が話し出した。

「私はユリ・ミストルティンといいます。今日、六人目の巫女になりました。これからよろしくお願いします」

な、今なんて言った…

確か六人目の巫女と、……え？六人目？？

「俺はアリア、アリア・ミルメスト。今日からユリの千年獅になります。これからよろしくお願いします」

今度は千年獅！？

「なぜこうなったかと言うと、それは……サラ、説明任せた！」

ぶはッ！！！

アリア、今サラ様を呼び捨てにして説明を押し付けやがった……

『では、私が説明しましょう。なぜこうなったのかといいますとそれは、私がこの子たちの力を知り、味方になって欲しかったので巫女と千年獅になってくれませんかと頼んだからです』

「二人はどのくらいの力があるんだ？」

「こいつらは、めっちゃ強いぜ！なんせあの時二人とも一撃で幽幻種百体位ぶっ倒してたし」

「「「「「なっ！！」」」」」

「それに、普通沁力の術式って結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系の５つだろ？でもこの二人は魔法系っつう新しい系統を創って使ってた。さらにものすごい沁力だったぜ」

「魔法系？なんだそれは。それとものすごい沁力ってどのくらいの沁力なんだ？」

「ええと、魔法系というのは私とアリアが創ったもので、簡単に言うと元からある５つの系統にはないものを詰め込んだのが魔法系です。あと沁力ですが、私はサラの２０００倍くらいの量の沁力を持っています。」

「あ、沁力は俺も一応あるよ。量はサラの１０００倍くらいだけど」

「「「「「「「「「「「えええええ！？」」」」」」」」」」」

その後しばらく会話が続きアリアとユリは巫女と千年獅の仲間入りとなった。

しかし、アリアとユリはサラに頼まれてなったとはいえ、護士や巫女見習いを飛ばしており、正式に発表するのはやめておこうとなり、二人は幻の六人目となった。

二人の正体を知っているのは巫女と千年獅にサラだけである。

6話　世界が原作と変わってきてる？（後書き）

それとキャラ崩壊してるかもしれません。

最後の方セリフばっかりになっちゃった…

これで幽幻種侵入事件を終わります

沁力は男性も女性も持っているもので、男性より女性の方が大きい沁力を持っているから巫女になっている　となってると教えていただいたのでこの設定で以降と思います。

変更点

沁力は女性だけがもっている

←

沁力は男性も女性も持っている

7話？　アンケートとお知らせ（前書き）

こんにちは咲亜です…

今回7話は　千年獅が護士候補生？！　をしようと思っていたのですが

何とちょうどキリがいいところまで行き、晩ご飯食べていました。

晩ご飯食べてパソコン見ると…

なぜかパソコンがすべてのページを閉じていたのです…

そうです、自分的には結構な量の7話が…消えてしまったのです。

咲亜は消えた7話と同じ内容は書けないです。

それと、今日は書きたくなくなりました・・・

なので明日、消えた7話以上の話を作ろうと思っています。

自分勝手なのはわかっていますが、今回は勘弁してください・・・

7話？　アンケートとお知らせ

～お知らせ～

６話の誤字を修正、ユリの心の中でのサラの呼び方修正を行いました。

ほかにも間違っているところがあれば指摘お願いします。

アリアとユリのイメージ決めました！！

アリアは…

咲亜の大好きなメロンパンをよく食べている少女、

シャナにしました。

見た目はシャナで髪は黒色、瞳は紅い、…あれ、これシャナそのままなのでは…

…あ、アリアはシャナとほぼ同じ感じということに…

そしてユリは

同じくシャナに出てくるヘカテーにしました。
髪はヘカテーの青っぽい色とは違い金髪で、長さは腰の少し上くらい、瞳は蒼色。
すこし想像しにくいですが自分的には気に入っています。
だれかイメージ画書いてくれたらうれしいのですが…
昨日2時から頑張って書いたんです。
そしたらなんとも言えない感じになりまして。・・・

～アンケート～

今まで視点変更するときは誰の視点か書いていませんでした。なので1つ目のアンケートは

1、視点変更時、誰の視点か書いたほうがいい。　ＹＥＳ、ＮＯ

もうひとつはアリアとユリについてです。
自分は次の話からイチャイチャさせようと思っていたんですが、これから少しずつアリアとユリが両思いになっていき少しずつイチャ

イチャさせていくのもいいかなと思ったので、

2、アリアとユリはすでにイチャイチャする関係、もしくはこれからイチャイチャする関係のどっちがいいかです。この質問はできれば詳細まで書いてくれると嬉しいです。参考にしたいです。

7話？　アンケートとお知らせ（後書き）

本編でなくてすいません><

8話　千年獅なのに護士候補生そして護士候補生から再スタート（前書き）

えっと、こんにちは咲亜です。

今日マラソン大会がありました。

距離は２１ｋｍらしいのですが実際はもっとあるとおもいました。だいたい２５ｋｍくらい…

とてもきつかったです。しかも最後１ｋｍで今まで歩いてたのでさて走るかと重い

「さて」といい深呼吸して走り出し、わずか5歩くらいで両足吊りました。

とても痛くてゴールするまで治りませんでした。今も違和感あります。

…マラソン大会は置いときましょう。

昨日は手抜きで本当にすいませんでした。

今のところアンケートですが視点は書いたほうが言いというのが全員でした。

アリアとユリのイチャイチャについてはまだどうなるかわからないのが現状です。

まだアンケート募集してるのでよければ参加お願いします。

今回は誰の視点か書いてみました。

それと今回はシェルティスがメインかな……

次からアリアとユリが多くなると思います。

では8話どうぞ

8話　千年獅なのに護士候補生そして護士候補生から再スタート

アリアｓｉｄｅ

俺とユリは今ユミィの部屋にいます。

なぜそうなったのかと言うと…

～少し前～

そう、それは会議での自己紹介を終えたあとのことだった。

俺達は天結宮(ソフィア)で働くことになった。天結宮(ソフィア)で働く以上天結宮(ソフィア)に住まないといけない。けれど、俺達はどこに住めばいいかわからなかった。なので俺とユリはサラにどこに住めばいいのか聞いてみたところ、

『２８７階に空いている部屋があるのでそこを使ってください。』

と言われたので、２８７階に住んでいる？ユミィに案内してもらった。

案内が終わり、俺はユミィに聞いてみる。

「ユミィ、氷結鏡界維持の交代はいいのか？」

原作なら幽幻種侵入の時から3時間、となっていたはずだ。しかし今はもう幽幻種侵入から3時間以上経っている。これも俺とユリ、

イレギュラーのせい？

「あと1時間だけ時間あるの。だからあと1時間私の部屋でお話しない？」

「俺はいいよ。ユリは？」

「私も話したいかな」

ということがあって今ユミィの部屋にいます。

俺達は椅子に座り、ユミィがいれてくれた紅茶を飲んでいる。

「ユミィは俺達になにか聞きたいことでもあるの？」

ユミィは　えっ？なんでわかったの？？　という顔をした。

「えっとね、さっきの大聖堂での事なんだけどね、どうしてシェルティスにはアリアとユリの事を知られたらいけないの？それと私がこれから何回もシェルティスと会うことになるっていうのはどういうことなの？」

あ、そういえばあの時、あとで話すよ。とか言っていたような…

うーん…どうしよう…

今はシェルティスに巫女と千年獅であることを知られない事、シェ

ルティスとはまだ面識を持つわけにはいかなかった事、ユミィがこれからシェルティスと何回も会う事、これらの理由は言えるはずがない…

だって、シェルティスに巫女と千年獅であることを知られたら、俺たちが護士候補生になってシェルティスに会ったときに、巫女と千年獅が護士候補生をしているとバレる。もしばれて、教官や他の護士候補生にもバレることになればいろいろと大変になる。例えば、巫女は5人しかいないはず、なのにその5人のうち誰でもない人が巫女になっている。6人目の巫女がいるならばなぜ正式に発表がない？と思われ、居づらくなる。

そして、ユミィがシェルティスこれから何回も会う事は、原作を知っているからで、それを言えるはずがない。まぁ…サラには未来をある程度知っていると説明した。けれどユミィに未来をある程度知っている　ということが知られれば、未来が分かるの？！となり、いろいろと面倒になりそうだから…

サラに未来をある程度知っているということを教えたのは、サラにこれから幽幻種侵入事件が起きると教えてしまい、しかたなく教えたのであって。他の人にはあまり教えたくない。
しかし、このまま何も言わないのも怪しまれる。

うーん…どうしよう…

やっぱりユミィにも話すしかないのかな…

話すとしても未来をある程度知っている　っていう設定の方だけど。

……しかたない、かな

「えっとね、これから言うことは絶対に誰にも言わないで欲しい。それが守れるなら教えるよ。」

「えっ！？アリア教えるの？？」

「隠すのは無理だと思ったから、それに誰にも言わないのなら教えてもいいんじゃないかな？」

「私は、アリアに任せるよ。」

「ユミィ、さっき言ったこと守れる？」

「うん。守るよ」

「じゃあ話すね。まず、俺は、未来をある程度知っている――――」

「！！！え？！　未来を…知っている……？」

「うん、知っている」

「なんで……未来を知っているの…？」

「それは言えない。なぜまだシェルティスには俺とユリが千年獅と巫女であることを知られてはいけないのかは、俺達はこれからサラにお願いして護士候補生に入る予定なんだ。だからシェルティスには千年獅と巫女であることを知られたくなかった。もし知ってたらなんで巫女と千年獅が護士候補生をしてるんだ？ってなると思ったから。そして俺たちが護士候補生になる理由――――それはこれからシェルティスにこれから起こることを知っているから。俺達はシェ

ルティスを死なせたくないからね。これから危険なことがシェルティスに起こる。未来ではシェルティスは死ななかったけれど、現実は死ぬかもしれない。だから俺たちがシェルティスのそばに居て守ろうと思ったから。あっ、そうそう、未来ではシェルティスは護士候補生として天結宮（ソフィア）に戻ってくる。どうやって戻ってくるかは言えない。けれどおそらく確実にシェルティスはここに戻ってくる。だから心配しなくてもいい。」

護士候補生になる本当の理由……

それはイレギュラーを倒すこと。

おそらくイレギュラーはシェルティスの前に現れるだろう。だからシェルティスと一緒にいるために護士候補生になったのだ。いや、これからなるのだ。ついでにシェルティスを未来（原作）とは違う未来にしてあげたい。

護士候補生として行動するならば沁力を使った技は見せるわけにはいかない。そうなると自分本来の力が出せなくなる。もしイレギュラーが現れたときに周りにシェルティスたちがいたら俺はどうするのだろうか。それは今考えても仕方がないだろう。

「シェルティスにまた会えるんだね。あっそろそろ時間だ、いそがないと。アリア、ユリ、私は誰にも言わない。シェルティスにも。そして教えてくれてありがとう。じゃあいってくるね」

ユミィは立ち上がり、部屋を開けて出ていった。

「氷結鏡界の交代が終わったらサラには悪いけど、護士候補生のこ

とお願いしにいかないとね」

「そうだね。じゃあサラに会いに行こうか」

キリエｓｉｄｅ

カフェテラス『二羽の白鳥（アルビレオ）』

第二居住区の大通りに面した喫茶店で、早朝から多くの常連客によって混みあう店だ。

「料理長―、あのねあのね、三番テーブルに紅茶セットだって！」

「ありがとうねユトちゃん、助かるわ」

混雑する野外席と対照的に、その店内で働いている人員はわずか３人。厨房では動く料理長とエリエ、あとは臨時でお手伝いをしているユトだけだ。

「ユトちゃん砲塔に働き屋さんね。もうすこしで休憩だからがんばって」

「えへへー」

頭を撫でられ、ユトが嬉しそうに走っていく

「しかしそれに比べて……エリエ、シェルティスは今日も有休？……それにあの子達はあれだし……」

後半はエリエには聞こえてないようだった。あの子達とはアリアとユリのことである。二日前にいきなり戻ってきて、「天結宮（ソフィア）で護士候補生することになったんだ。だからこれから天結宮（ソフィア）に住むことになってあんまり会えなくなる」と言われたのだ。しかも、このことは誰にもいわないでほしいと言われたのだ。シェルティスも心配だが二人のことのほうが心配だ。

「あと一日だってー、まだ疲れが抜けきっていないんだとか」

「シェルティスが寝込むなんて珍しいわね。元気だけが取り柄かと思っていたのに。」

「ま、さすがに今回はしょうがないんじゃない？」

朝食セットのサラダを盛り付ける手を休め、エリエはふっと苦笑をもらした。

……きっと誰も信じやしないんだろうなぁ。

こんな普通のカフェテラスで働く少年が、天結宮（ソフィア）の巫女たちを救っただなんて。

「で、も、それはそれ！これはこれよ！」

トレイを抱えたまま拳を握りしめ、そして。

「シェルティスのアホー！あたしに働かせておいて一人寝坊なんてずるいんだから！」

従業員用通路に向けて、エリエは思いっきり声を張り上げた。

シェルティスｓｉｄｅ

『シェルティス、今日もサボリですか？』

「……有休休暇だよ」

従業員用の住み込みの一室で。

鳶色の髪の少年が、自分のベッドに仰向けに寝転がっていた。横になってはいるが目は開けたまま。その視線は自分の胸元、ペンダントに取り付けられたイリスへ。

『しかしまぁ、今回は本当に行き当たりばったりでしたね』

「……」

『片っ端から幽幻種を倒そうとして全身がボロボロ。天結宮（ソフィア）の経路だって、私が道案内してなかったらそもそも統率個体の到着まで間に合っていたかどうか』

「……いや、なんといいますか。あれは」

『そしていま、気頃の運動不足がたたって全身カチコチに筋肉痛。三日間こうしてベッドに寝ているだけ』

「……う……そ、そんなことは……」

『レオンは次の日から、何事もなかったかのようにトレーニングしてるそうですよ？』

「……」

『いいことないですね、シェルティス』

「うるさいやい」

うつぶせにひっくり返り、枕に顔を押し付けて――――――

『でも、ユミィを守ったのは紛れも無くあなたです。それは胸を張っていいですよ？』

どこか楽しげに、笑いかけるようにイリスは言ってきた。

『巫女の祈りの三日間が過ぎました。今日からまた皇姫が氷結鏡界を支えますので、ユミィに会いに行くことは可能です』

そう。氷結鏡界の崩壊と幽幻種の侵攻は、もう三日前の出来事だった

「そうなんだけど、ちょっと…ほら、会いにくいというか」

天結宮(ソフィア)で統率個体を倒したあとに来たさらに大きい幽幻種。僕はそれにやられて、気がついたら救護階で治療されてベッドで寝かされていたのだ。レオンに聞くと、僕がやられた幽幻種退治され、ユミィ達は無事だったとのことだ。

『この甲斐性なし』

「行くよ、行くってば！……だけど少し決意の時間が」

と、にわかに店内の方向から歓声。

「あれ、何かあった？」

ベッドから起き上がり、シェルティスは店内の方へ耳を傾けた。なんだろう、誰かが騒いでいるらしき歓声が聞こえてくる。

「おーいシェルティス」

ばたばたと騒がしい足音がし、ノックもせずに部屋の扉が開いた。顔を出したのはつなぎ姿に厨房用のエプロンを羽織った少女。

「どしたのエリエ」

「お客さんだよー。はい、それじゃあたしは引っ込むからごゆっくり。」

僕宛にお客さん？特に今日は約束はなかったはず。そう考えていると部屋に一人の少女がゆっくりと歩いてきた。

鍔の大きな日除け帽に白のワンピース。顔は帽子の影に隠れて見え

ないものの、伸ばした髪が証明の光りを浴びて黄金色に輝いているのが見て取れた。

「ええと、どちらさま」

「……」

少女は答えない。そして無言のまま突然、椅子の上に置いていたクッションを手に取りそれを思いっきり力を込めて投げつけてきた。

「ちょっ、う、うわっ！な、なにを？」

「ばか、天結宮（ソフィア）に来ると思っていたのに……いつまで待っても来ないんだから！」

起こったように肩で息をする少女。その帽子の下には、自分の見知った少女の顔が。

「……ユミィ？」

目の前に彼女が立っていること。すぐには信じられなかった。

確かに、自分の居場所なんて調べようと思えばすぐに調べられるかもしれない。けどユミィは天結宮（ソフィア）の巫女であって、居住区なんか滅多にこれるはずがない。

「ついてきて」

「え？」

「いいから、早くこっちついてきて！」

有無を言わさず歩き出すユミィの後を慌てて追いかけた。

店員用の裏口から薄暗い小道に入り、北へ北へ進んでいく彼女。物言わぬその背中は、なんだか、彼女の無言の怒りを代弁しているような気がした。

「……ユミィ、もしかして怒ってる？」

その瞬間、先行くユミィの足がピタリと止まった。

「氷結鏡界を三日間祈り続けて、終わった今日の朝一番に来てくれるだろうって思って待ってたのに、誰かさんはいつまで待ってもこないんだもん」

横顔を向けたままの少女。そのまぶたは、疲労のせいで僅かに腫れていた。

……それなのに待っててくれたんだ。

氷結鏡界を支えている三日間、巫女は食事も睡眠もなしで祈り続ける。誰よりユミィが疲れているはずなのに。それを押してまで自分から来てくれたんだ。

「……ごめん」

「いいよ、わたしだってホント言うと怒ってないの」

被っていた帽子をそっと外し、ユミィガいたずらっぽく微笑んだ。

「居住区(ここ)歩くの久しぶりなの。ずっと天結宮(ソフィア)に籠もりっぱなしで、だからこうして歩くのすごく楽しい。」

「……そういえば、僕たちどこに向かってるの？」

「秘密(ないしょ)。でも悪いところじゃないよ」

人気のない細い小道を進み、北へ北へ歩いていく。薄暗い路地を通り、薄汚れた道を進んでいく。決して綺麗とは言えない道だけれど、それでも足取りは軽かった。

――――誰にも見つからない、誰の邪魔もされない二人だけの時間。

二人きりで歩くのなんて何年ぶりだろう。ユミィがこんな道を選ぶのも自分と同じ心境なのかもしれない。そう思った。

歩き、歩き、歩き。

いつしか目の前には、天上へはてなく伸びる一本の塔がそびえ立っていた。

「さ、ついたよ」

白く輝く塔を前にして、ユミィが空を仰ぐように両手を広げた。

「天結宮(ソフィア)？」

「そそ。さ、ついてきて」

巨大な防護壁で覆われた敷地、その入口である巨大な正門へ彼女が歩いていく。すでに言付けがなされているのだろう。入口の門番も誰一人こちらを疑う者はいなかった。

「おまたせ、連れてきたよ！」

扉を抜けてすぐの地点で、ユミィが目の前の４人に向かって大きく手を振った。

「思ったより早かったな」

腕組みの姿勢で立っていた銀髪の青年が、まず小さく手を上げる。

「レオン？」

「春蕾がな、助けてもらった礼を言いたいんだそうだ」

苦笑する彼の後ろ、黒髪の少女がレオンの背中に隠れるようにして佇たずさんでいた。見覚えがある。大聖堂でユミィと一緒にいた巫女だ。

「……あ、あの……あり……が、……と」

ぺこりとおじぎし、またそそくさとレオンの背後に隠れる少女。

「気にしなくていいよ、僕だって結局途中で負けちゃって気を失っちゃったからね」

そう、僕はあの時ユミィを守れなかった。結果としてユミィや春蕾は無事だった。ただそれだけだ。

「よー、また会ったな。シェルティスだっけか？」
その隣で、千年獅用のジャケットを羽織った少女が気楽な様子で手を上げた。
「あれ、もしかして第三居住区で会った子？」
「おう、オレは爛な。あの時は部下が世話になったぜ。おかげで奇蹟の死者ゼロ！半分くらい入院中だけど、ま、あいつらなら一週間もあれば治るだろ」
底抜けに明るい雰囲気で笑う少女の隣。それとは対照的に落ち着いたドレス姿の女性がしずしずと近づいてくる。
「そうねー。いきなり現れたときはびっくりしたけれど、助かったわー」
のほほんとした九町で女性が小さく会釈。
「巫女のメイメルよ0。よろしくね。ユミィと幼なじみだったんでしょ？なんでも昔は一緒にお風呂まで入った中だとかー」
「……なっ！メイメル、こんな時になにをっ！？」
「あらあらー、本当のことなんでしょ。ユミィってばそんなに怒らないで」
怒りの剣幕で手を振り上げるユミィをなだめる長身の巫女。

「ふざけるのはここまでにして、と――本当にありがとう。巫女を代表して礼を言うわ。あなたがどれだけの働きをしたのかはユミィから聞いてるわ。サラ様も礼を言いたいって言ってたし、天結宮（ソフィア）で過ごすうちに本人と会う機会もあるでしょう。」

……天結宮（ソフィア）で過ごすうち？それってどういうことなんだろう。僕は居住区の人間であって、皇姫に出会うことなんて二度とないはずなのに。

「ユミィ、どういうこと？」

「キミが塔を上がってきたとき、それを見ていたのはわたし一人じゃないんだよ」

指先にひっかけた帽子をくるくる回しながら、ユミィが意味深に片目をつむる。

「メイメルも言ってたでしょ。全部わたしと春蕾が、メイメルと爛に念話で送ってた。だから、ここにいるみんなが証人――ほら、レオン」

「そうだ、渡し忘れたな」

レオンが何かを空高く放り投げる。

光を浴びて輝く銀色の員章、弧を描いて富んできたそれを宙で掴んだ。

――その員章には、見覚えのある名前が刻んであった。

「これ…僕の員章？」

二年前に没収されたはずの員章。とっくの昔に破棄されていたかと思ったのに。

「手間どったぞ。俺とユミィに、春蕾、それにそっちのメイメルと爛、非公式に他二人。天結宮（ソフィア）の最上級位の署名を７つ———お前の過去の記録は抹消済みだったから手を出せないが、とりあえず一席。天結宮（ソフィア）の隊員候補生として一人分の空きだけはねじ込めた。一番下からの再スタートだ」

その言葉に、シェルティスは再び自分の員章を見つめた。

自分の名前の下にある階級は白紙だけれど、その入宮日となる日付は———今日。そしてその下に、皇姫の名が刻まれた朱筆まで。それはつまり。

「……うそ、だって僕は……本当に、いいの？」

緊張と驚きに、喉が震えてうまく声がでない。

永久除籍だったはずの自分が、もう一度天結宮（ソフィア）の護士に……

「さっさとここまで上がってこい。お前が居ないと俺の訓練も張り合いがない。」

レオンが再び何かを放り投げる。今度は二つ、先の員章よりも大きい何か。

見覚えある双剣の、その柄。

「お前が三年前まで使ってた剣だ。俺が預かっててもしかたないしな」
右手に一つ左手に一つ。空中を舞う剣をその手で握りしめる。懐かしいその感触には、かつて手にしていた確かな重みがあった。
『もちろん刀身はわたしが構築します。また長い付き合いになるかと思いますが、今度は何年も放置とかしないでくださいね』
「……うん」
「あのねシェルティス」
ユミィが塔の最上階をじっと指さした。
「わたし、ちゃんと巫女になれたんだよ。だから……」
その視線をなぞるように。
天結宮（ソフィア）の真下からシェルティスもまた、天へと伸びる東野頂上を仰いだ。
「わたしも一番上で待ってるから。キミも今度こそ早く来ること！わかった？」
それはきっと、単に塔の最上階という意味ではないだろう。
浮遊大陸（オービエ・クレア）を守る巫女、そして護衛（パートナー）を担う天結宮（ソフィア）の最上位――――千年獅。

――今度こそ、キミがわたしの千年獅(パートナー)になってくれるのを待ってるから

少しだけ照れくさそうに、けれど嬉しそうにユミィが空を指さした。

「……そうだね」

そんな彼女に、シェルティスは力強くうなずいた。そう、こんな望まぬ魔笛をやどした僕にだって、自分にしかできない事がきっとある。だからやり直そう。

たとえ一番下の階級からの再スタートだって構わない。時間が掛かってもいい。

いつか、必ず――

「必ず行くよ。今度こそ、塔の一番高いところまで。そして僕がユミィを守ってみせる」

そう、今度は僕がユミィを最後まで守ってみせる。

8話　千年獅なのに護士候補生そして護士候補生から再スタート（後書き）

今日マラソン大会の後教室で東方とモンハン３ｒｄを借りました。

モンハンは手つかずですが、東方はすこししてみました。

あれはいいですね！とても気に入りました。

みなさんもよければ東方してみてはいかがでしょうか

9話　ユリ、料理に目覚める！？（前書き）

こんにちは咲亜です。

今ＩＳとゼロの使い魔の二次創作にはまってます。

昨日は更新できず申し訳ありませんでした＞＜

昨日は親の脅迫っぽいバイトの日であり、ずっと働かされておりました。

ウェイトレスや皿洗い、簡単な料理を作ったりなどいろいろしました。

それはいいとして…

今回、ユリとアリアが今までと変わった気がします。

しかも、アリアはユ―――　これは本編で。

アリアはすこし変かもしれませんがスルーでお願いします。

では9話どうぞ

9話　ユリ、料理に目覚める！？

アリアｓｉｄｅ

「やっとここまで来れた」

「そうだね、でもこれからが本番だよ」

そう、これからが本番。

これからいろいろなことが起こる。そしておそらくイレギュラーも加わってくるはずだ。

俺とユリは入隊式のため野外訓練場に向かっていた。

ああ、シェルティスは今頃たしか・・・ユミィと訓練上に向かってるんだろうなぁ・・・

早くシェルティスとユミィが手を繋いだり抱き合ったりさせてあげたい。けど俺が知っている８巻までにはその問題は解決されなかった。どうすればいいんだろう・・・

シェルティスｓｉｄｅ

天結宮（ソフィア）、野外訓練場―――

二十人近くの新たな護士候補生が並ぶ中で、ユトと同じくらいの年齢の少女が二人いた。
あの子達も護士候補生？

「あの・・・・・その・・・・・ですから・・・巫女の一人としてみんなの・・・・・じゃなかった、皆様のご入宮を心から嬉しくおもっ、思っています！・・・・あ、ええと、それでは・・・身体に気を付けて頑張ってくだっ、くださいね！」

壇上にて、顔を真っ赤にして会釈する巫女がいた。

『相変わらずですね』

「だね。いつものユミィで安心したけど」

挨拶を終えた彼女が壇上から降りてくるのを、紺のスーツ姿の女性教官が出迎えた。

「素晴らしいご挨拶でしたユミィ様」

「ほ、ほんと？よかった！」

「ええ、前回の四割増しで上達されておいででした。前回の……あの放送禁止級の発言は正直どうしたものかと思いましたが、今回は素晴らしい出来栄えです。」

「あ、あれは言い間違えです！ひどい、もう言わないって約束だったじゃないですか！」

慌てて教官を止めようとするユミィに対し、教官が笑って首を横に振る。

「はっはっは、それはもう過去の出来事ですよ」

……ユミィさん、あなた前回の挨拶で何やらかしたんですか。

「それではこれで失礼します。」

———じゃあねシェルティス、頑張って

いたずらっぽい笑顔で片目をつむり、ユミィがその場を後にする

ユリｓｉｄｅ

「あ、あれは言い間違えです！ひどい、もう言わないって約束だったじゃないですか！」

ユミィがそう言うと教官は笑って首を横に振った。

「はっはっは、それはもう過去の出来事ですよ」

ユミィ何したんだろ。いつか聞いてみたいな

アリアも私と同じことを思ってたみたいで

「ユミィって面白いね。からかうと楽しそう。あといつか前回何し

たのか聞かないとね」

からかうのはいけないんじゃないかな・・・？

でも、慌てるユミィ面白いからいいかな？

そんなことを考えてると

「それではこれで失礼しますね。」

ユミィがこの場を後にすると

「さて巫女様の挨拶も終わったことだし、これで今日の入隊式は終わりだな」

危なそうな笑みを浮かべて女性教官が振り返った。

「自己紹介が遅れたが、私は諸君らの教育を担当するユメルダだ。各々、今日は解散。明日から足腰立たなくなるまで鍛えてやるから覚悟しておけよ」

他の人から教わるのってなんか抵抗あるなぁ・・・

今までアリアか幽幻種と戦って強くなってきた。すなわち、私たちには師という人がいないのだ。今まで独学で訓練してきたから、他の人から教わるのってなんか嫌だなぁ。

いきなり隣から声が聞こえる。

『えーもう終わりですか、つまらない。せっかくだから大暴れする

かと思ったのに』

「ものすごい人ごとですねイリスさん。だから僕はただでさえ徹夜明けにレオンに襲撃されて、早朝訓練に五時間近く付き――」

これからなにか起きるのかな？と思ったユリはわくわくした気持ちを隠し会話を聴いていた。

そういえばいつからシェルティスとモニカだっけ？達に介入すればいいんだろう…

部屋に戻ったらアリアに聞いておこう。

「アリア～、部屋もどろ？」

「そだね、戻ろうか」

私とアリアは護士候補生の宿舎の部屋ではない部屋に向かって歩きだした。

シェルティスｓｉｄｅ

「ものすごい人ごとですねイリスさん。だから僕はただでさえ徹夜明けにレオンに襲撃されて、早朝訓練に五時間近く付き――」

――誰？

言葉を途中で呑み込み、背後に感じた視線えと振り返った。

『どうしましたシェルティス』

「……イリス、あの子誰だか分かる？ほら、木陰にいる。」

訓練上の奥。十数メートル先の木陰に立つ少女を視線で示す。

鮮やかな桜色の長髪をうなじで一つに結わえた少女。歳は自分と同じくらいか、もしかしたら一つか二つ年上かもしれない。物静かな雰囲気と鋭い眼差しが印象的だ。

『あのこがどうかしましたか』

「いま、あの子が僕のことじっと見てた」

今は素知らぬ顔で柔軟体操をしているが、確かに一瞬、振り返った自分と視線が合った。彼女が着ているのは白を基調とした天結宮（ソフィア）の儀礼服。その方に正護士の徽章（きしょう）がないことから、自分と同じ護士候補生であることまではわかるのだが。

『うーん…たぶん知り合いではないと思いますよ。私のデータにも彼女らしき人物とどこか出会ったというような記録はないようですし』

「そっか、ならいいんだ。」

……でもなんだろう、変な感じ。

今は黙々と柔軟体操をしている彼女――単に視線が合っただけなのに、頭の中で違和感にも似た何かが引っかかって離れない。

……あの凛とした感じ。僕、あの子と前にどっかであったっけ？

「あれ、誰だっけなぁ。多分直接話したとかそういうことじゃないと思うんだけど」

『単に天結宮（ソフィア）ですれ違ったことがあるんじゃないですか？』

そう、自分でもイリスの言う程度のものだと思うのだ。けれど、目と目が合ったせいかもしれないが、さっきの彼女の視線が妙に気になって仕方ない。

「うーん……まぁそんなに気になるわけじゃないんだけど。ただ――」

煮え切らない気持ちを胸に訓練上の真ん中でじっと佇立。

が、至高の整理もつかないうちに。

「おい貴様、いつまでここに残っている」

砂を弾く硬い足音。振り返ったその先についさっきのユメルダ教官が腕組みした恰好で立っていた。

「私は解散と言ったはずだが、わざわざ私の命に逆らうように突っ立っているということは、その命令に従う気がないという意思の表れか？」

紫煙をあげる煙草を足元に放り、その火を靴のつま先で踏み消す女教官。その表情には、獲物を見つけた肉食獣を思わせる剣呑な笑みが浮かんでいたりする。

「え……い、いやその……何といいますか」

シェルティスが一歩下がる間に、彼女は二歩分の距離を詰めてきて。

「なるほど、教官の命令を聞かない坊やには、そうやら早々に愛の鉄拳をくれてやる必要がありそうだな」

「ちょ、ちょっと待った！あ、あのですね……って、うわっ！」

ジッ――――あわてて身体を真横に逸らすと同時、剃刀じみた鋭さで振りおろされた拳が頬のすぐ横を掠めていった。ふわりと揺れる前髪は、拳の風圧だけで舞い上がったものだ。

「……ほう、貴様、私の拳を避けたか」

「え、あ、あの？」

「くっくっく、これはこれは」

怒られると思いきや、なにやら嬉しそうに拳をポキポキとならす彼女。

「護士候補生で私の拳を避けた生徒など何年ぶりかな。これは久しぶりに鍛えがいのある新入と巡り会えたようだ」

「はい？」

聞き返す前に、むぎゅっと首根っこをつかまれた。

……あれ、そういえば今日の朝もレオンにこんなことされたような気がする。そしてこの流れは…

「あ、あのですね？僕これから休憩に」

「ついてこい。貴様は特別に、今日から私の特製カリキュラムで鍛えてやる。安心しろ、私の訓練に耐え抜けば正護士になるなどあっという間だ」

「だ、誰が――――――っ！」

アリアｓｉｄｅ

俺とユリは部屋にもどってくつろいでいる

今頃シェルティスがユメルダにいじめられてるだろうなぁ…と思っていたらユリが話しかけてきた。

「ねえ、アリア、私たちいつからシェルティス達に介入するの？」

そういえばユリには言ってなかったっけ？

「えっと、これから少ししてシェルティスとモニカとレオンの極秘

任務の時にレオンに頼んで一緒に付いていこうと思ってる。だからそのときから介入開始かな？」

「その極秘任務っていつあるの？？」

「えっと、確か……明後日にシェルティスに話がいって、その次の日が任務だから三日後？かな」

「ねえ、アリアお腹空かない？食堂に食べに行こうよ」

「そうだね、そろそろ空いてきたかも」

俺とユリは食堂に向かった。

食堂には人が溢れていて賑わっていた。

「うわぁー、人多いね。私静かに食べたいんだけどなぁ…」

俺もユリと同じ意見だ。しかし

「しかたないさ、天結宮（ソフィア）には人が沢山いるし、それが嫌なら自分で作るとか？」

「うーん・・・アリアは私の手料理食べたい？」

！！え？　ユリの手料理？？

本音は食べてみたい　である。しかし、ユリとは付き合ってもいないのにユリの手料理とか食べてもいいんだろうか？それにユリって

料理できたの？！

どう答えよう…

ここは素直に「食べたい。」と答えるべきか、もしくは嘘で「いや、いい」と答えるか…

前者ならユリは悲しまないだろう、と思う。

後者なら傷つくはず…

ならばここは、

「俺は食べたいかな。ユリが料理出来るって知らなかったし」

…すこし、ごまかしてしまったが仕方がないだろう・・

「私料理したことないよ??」

・・・え？　料理したことないの？

「料理したことないの・・・？」

「うん、でもアリアが食べたいって言うならがんばって練習するよ！」

ユリっていい子だよね、俺はそんなユリと6年間一緒に過ごしてきた。

そして俺はその6年の間にユリを好きになってしまった。けれど、

ユリにはなにも言ってない。だってもしさ、告白して振られたらユリと今までの関係がなくなりそうだし、なにより俺が立ち直れなくなりそう…だから未だに何も言ってないのだ。

い、今のことは絶対に秘密だぞっ！？

それは今はいいとして、

「あ、ありがとう」

緊張してしまった。

そして、後にユリは天結宮（ソフィア）で有名になる。料理の腕と巫女として・・・

・

9話　ユリ、料理に目覚める！？（後書き）

アリアの意外な？予想通りの？ことが発覚しました。

アリアは振られるのが怖くて告白できないとは・・・なさけな――

―ゲフンゲフン

えっとアンケートですが一応締め切らせていただきます。

結果は、どうしよう？

１０話　アンケート結果（前書き）

こんにちは咲亜です。

今回わざわざアンケートだけに１話使ったのは、

前書きや後書きでは読んでもらえない可能性があったので確実に読んでもらえるようにこうしました。

無駄遣いですがご勘弁を・・・

10話　アンケート結果

～アンケート結果発表～

咲亜「アンケート結果発表です。こんかいはアリアとユリに来てもらいました」

アリア「アリア・ミルメストです。よろしく」

ユリ「ユリ・ミストルティンです。よろしくお願いします」

咲亜「えっとこんかいのアンケートは2つありました。そのアンケート内容は――――

1、視点変更のとき、誰の視点か　書く、書かない

2、アリアとユリの関係について

既に両思いでいろいろイチャイチャする関係

まだ両思いではなくこれからすこしずつイチャイチャする関係

――――となっていました」

アリア「で、その結果は？」

ユリ「気になる～、とくに2番が気になるね。私とアリアのこれからが決まるんだし・・・」

咲亜「さくっと言うよ？まず――――――――――

1、は　視点変更のとき、誰の視点か書く　というのが全員でした。

これはちょこちょこっと書けばいいだけなので簡単なんですが…

2、は分かれました。その結果一部の人にとっては、希望通りにならないので

いつか番外編という形で両方やろうと思っています。

そして、本編では、

2、アリアとユリの関係。　これからイチャイチャしだして両想いになって

いろいろとする。

となりました。」

ユリ「すぐにはイチャイチャできないんだ…ちょっと残念かな。でもこれから出来るだろうしまぁいっか♪」

アリア「でも俺としては、最初からイチャイチャするの方がよかったな。だって告白するのはずかしいよ・・・」

ユリ「じゃあ、私から告白してあげよっか？私はアリアの事大好きだよ、私はずっとアリアのそばにいるよ。」

アリア「えっ！？え、ええ、ええええ？
お、俺もユリのこと好きだよ。」

ユリ「なら、早速する？」

アリア「え？なにを？」

ユリ「まぁまぁ部屋にもどったら教えてあげるから♪」

――アリア・ユリ退場――

咲亜「……私、空気だった……
じゃ、じゃあ、これで・・・終わります・・・」

１０話　アンケート結果（後書き）

えっと、暴走してすいませんでした。

なんか番外編がすこし待てなくて・・・

こんかいは本編とは全く関係ありません。

こんかいは本編とは全く関係ありません。

大事なことなので2回言いました。

咲亜は文才が皆無で、キャラ崩壊や誤字やなにやらいっぱいあって、

恋愛話も下手ですががんばるので見捨てないでくれると嬉しいです。

ではこれからもよろしくお願いします

１１話　入隊２日目　（前書き）

こんにちは咲亜です。

今日学校でいろいろ考えていたんですが

クリスマスのときに番外編でクリスマス編しようかなぁーとか思いました。

そして、どうせするなら４万文字すべてつかいきってみたいなぁ・・・とかも・・・

４万文字で１話・・・読むの大変そうです。書くのも・・・

11話　入隊2日目

シェルティスside

「あれ、道に迷った？」

広大な天結宮（ソフィア）の敷地にて、シェルティスはぽかんと辺りを見渡した。

「おかしいなぁ、昨日はたしかにこの道を左だったはずなんだけど」

『しぇーるーてぃーすー？だから最初は電子マップに載ってる道をっていったのに、こんなところを昨日の小さい子供に見られたら笑われちゃいますよ？』

「いや、だってイリスがいれば平気かなって思うじゃない。」

昨日の入隊式に向かう道。ユミィに案内された道は正規の歩道ではない近道だったのだが、今日もそれをたどろうとしてこのありさまだ。

「で、正解はどのみちなの？」

『ごめんなさい、その時わたし寝てて記録とってないです』

『少し引き返して電子マップ上の正規ルートをすすむことを推奨します』

「やれやれ、それしかないよね」

頷く代わりに肩をすくめ、歩いてきた道へと振り返る。その瞬間、自分のすぐ後ろを歩いていた少女と目が合った。

「……君は」

「わたしに何かようか？」

まず目に映ったのは鮮やかなサクラ色の長髪。

陽を浴びて輝く髪をうなじで一つに結わえた、青みがかかった灰色の双眸をした少女だった。物静かな雰囲気に落ち着いた口調、それと対照的な鋭いまなざし。

「あ…ええと、その」

昨日のことを聞くべきか、聞いて良いのだろうか。

自分の思い違いという可能性もゼロじゃない。どう声かければいいのか迷っている間に、彼女はすっと指先を歩道に向けて。

「引き返さずとも、訓練場はこの道を左に折れて進めばいい」

「え……？」

「どうせ道に迷ったんだろ？新米の護士候補生がよくやることだ」

そのまま、指先を向けた方向へ自らスタスタと歩いていってしまう。彼女の背中が小さくなるのをただただみつめて。

「……行っちゃった」

ぼんやりとしたまなざしでシェルティスはその背中を見送った。
本当に誰だろう。悪い人じゃなさそうだけど。

アリアｓｉｄｅ

野外訓練場に立ち並ぶ二十人近い護士候補生。
「……であって天結宮（ソフィア）の護士は大まかに分けて四つに分類される。貴様ら護士候補生。二つ目が正式な護士として巫女の護衛を行う正護士。３番目が正護士達を取りまとめる隊長級、幹部級である錬護士。最後が巫女の専属護衛（パートナー）となる特別階級――――千年獅だ。」
「という訳で、貴様らはまず正護士になることを目指さなくてはならない。それまでは候補生・・・・もちろんそのままでも任務は与えられるが、最重要である巫女の護衛という任務は与えられないままとなる。それでは意味がないだろう？」
ホワイトボードに流麗な字で書きつづっては、その数秒後に消してしまう。書いて覚えるというより、その場で頭に叩き込めということなのだろう。

ああ、めんどくさいなぁ・・・はやく戦いたいな・・・・

「それと、護士とは別に隊員という呼称を用いることもある。その時は―――」

「おい、昨日の新入り」

え？俺ですか？！

ユメルダは確かに俺の方を指さしていた。

「『護士』と『隊員』という呼称において、その違いを言ってみろ。」

・・・・どうしよう・・・わかんない・・・

「え、ええと、わかんない」

あ、敬語で喋るの忘れてた…

ユリの方を見るとなにかいいたそうな顔をしている。おそらく今のことについてだろう。

「貴様！私に向かってため口とは、いい度胸だ。あとでいじめてやるから覚えていろ、おい、そこの少年答えろ」

はぁ……

ユメルダは今度はシェルティスを指さしていた。

「・・・『隊員』の場合は、巫女見習いも含めた呼称だった気がします」

「そうだ、『隊員』という呼称を用いた場合は正護士、錬護士、それに巫女見習いという意味になる。――――」

しばらくユメルダの話が続き、話が終わるとシェルティスに何か言ってこっちにむかってくる。

「貴様とお前はこれから特別コースを用意してやった。私の愛に泣いて感謝しろ」

・・・

その特別コースはただひたすら砂漠のフィールドを走るというものだった。

シェルティスはユメルダを背負って走っていた。シェルティスって案外すごいと思った。だって人一人背負ってあの距離を走りきるとは・・・

その後最初の場所に戻ると、ユメルダはシェルティスに話しかけて

いた

「入隊して三年目になる候補生だ。剣技の基本に関してはおおよそ習得済みといったところだな。最初は厳しいだろうが、腕試しに挑戦してみろ」

シェルティスと戦う相手はっと・・・大剣を持った若い男の剣士だね。

お互い剣を構え、向き合う。

１秒・・・１０秒・・・

一分が経過して、まだ動かない。

あの程度シェルティスならすぐ勝てると思うんだけどなぁ。

カツッ。

大剣の剣士の足元、つま先が小石を弾くかすかな響き。――――来る！

「はっ！」

鋭い気勢とともに大剣が振るわれる。

大気を切り裂き、鋭い音となり駆ける銀閃。

が、それより前にシェルティスは剣士の懐まで一挙動で飛び込んだ。

死角に飛び込まれたことを悟り相手の表情が一変。後方に跳躍する剣士。それを追ってシェルティスは前へ跳躍した。

左の剣で相手の剣士の右ひじを強打、さらに右の剣で剣士の左肩を叩く。

数秒に満たない交叉の先に。

・・・カランッ。右ひじと左肩を打たれ、握力を失った剣士の手から大剣が滑り落ちた。

「そこまで――――と言う必要もないか」

「ふむ。相手の足元で小石が跳ねた音を読み、間髪いれず躊躇なく飛び込んだか・・・危なっかしい判断だが、それを可能にさせる程度の体術の心得はありと――」

「お前の員章貸せ」

「え？」

「いいから、ほらさっさと」

「はぁ・・・」

銀色に塗装された員章を手渡すと、彼女は穴があくほど見つめ――――

「ふむ。シェルティスか、数年前に同じ名前の双剣士がいたような気がするが」

「そ、そうなんですか」

「・・・・ま、構わんがな。それと、次はお前の番だ。お前はまだ小さいし女だからな。さっきの奴よりすこし弱い奴と戦わせるか・・・・お、あれでいいか。」

そう言って、俺を指さしたあと、すこし遠くにいる片手剣の剣士を指さした。

・・・あ、また勘違いされてる。はぁ・・・めんどいし、ほたっとこうかな・・・

「ええと、あれと戦うんですか？」

「ああ、そうだ。お前武器は何を使うんだ？」

「あーめんどいんで武器なくていいですよ」

「貴様、いくらなんでもそれは舐めすぎだ。相手はお前より先輩だぞ？・・・まぁとにかく戦ってみろ」

俺は片手剣の剣士と向かい合った。

「それじゃあ、はじめるぞ、はい、はじめ！」

シュッ――――

「なっ！！」

俺は開始そうそう相手の後ろに移動した。まぁ、いきなり相手が消

えたんだから普通は驚くよね。そして、相手が振り向く前に首に手刀を打つ。

「うっ・・」

相手剣士はちいさくうめき声を発し、前に崩れていく。

カランッ。

「……」

周りで見ていた人が無言になる。

ユメルダも刹那無言だったがすぐに気を取り直し、

「そ、それまでっ！」

開始わずか数秒で決着がついたのだった。

俺はユメルダの方へ歩き出す。ユメルダの隣にいるシェルティスはまだ驚いていた。

シェルティスｓｉｄｅ

信じられなかった。

目の前で開始すぐに、消え、相手の後ろに現れる。そして剣士が振り向く前に気絶させる。

その一連の動作すべてにシェルティスは驚いていた。

普通はまず最初の消えるほどの速さで移動なんかできない。

しかもそれをやってのけたのは、僕よりも小さな少女。たしかこの少女は昨日入隊式のとき見た二人組の子の内の一人だったとお思う。

もしそうならば、もう一人の子も同じことができるのだろうか・・・

そう考えているとすぐそこまで黒髪で紅い瞳の少女が来ていた。

「シェルティスとかいったな、員章返すぞ。そしてほれお前も員章貸せ」

教官はそう言うと少女は員章を教官に渡す。

すぐに員章を返すと、

「ふむ、アリア、９才。最年少で入隊か…。まぁそれはいい、アリ

ア、シェルティス、一級から二級への昇格を承認する。『褒賞システム』への申請も明日から可能になる」

「「褒賞システム？」」

三年前には効かなかった単語だ。アリアと呼ばれていた少女も知らなかったらしい。

「それは自分で調べるんだな。今は訓練に集中しろ・・・・と言いたいところだが、とりあえず三十分の休憩が隊員規則で決まっている」

そう言うと教官はどこかへ立ち去ぅていった。

それを聞いた少女も立ち去ろうとする。

僕はすこしこの少女が気になったんだと思う。

「ね、ねえ、君の名前は？僕の名前は、シェルティス・マグナ・イール。」

「アリア。アリア・ミルメスト。」

少女はきちんと無視せずに返してくれた。

アリアは自分の名前を言うとどこかへ行ってしまった。

１１話　入隊２日目　（後書き）

最近短めです・・・

すいません＞＜

もっとがんばります！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7273y/

氷結鏡界のエデン　目指すはハッピーエンド

2011年11月28日23時49分発行